

資料

(平成十六年十一月)

第四十九回「合宿教室」(阿蘇) 感想文集

——日本人としての自覚をもとめて——

社団法人 国民文化研究会

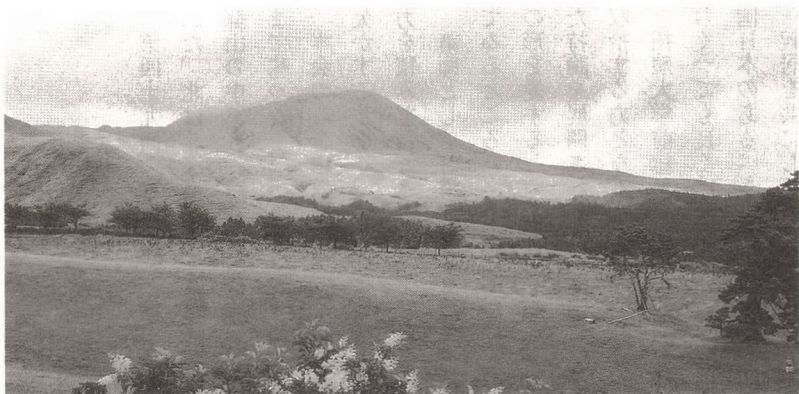
回数	年度	開催地	参加人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野見
3	〃 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲 仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿 蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大 分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲 仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿 蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿 蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧 島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿 蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲 仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧 島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿 蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲 仙	332	木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一
23	〃 53年	阿 蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧 島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲 仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿 蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧 島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲 仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿 蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿 蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島 原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿 蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・關正臣
33	〃 63年	島 原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島 原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿 蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚 木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿 蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥富修一
38	〃 5年	厚 木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿 蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚 木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道
41	〃 8年	阿 蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚 木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村總一郎
43	〃 10年	阿 蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎
44	〃 11年	富 士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
45	〃 12年	阿 蘇	154	小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義
46	〃 13年	富 士	150	伊藤哲夫・長谷川三千子・小野吉宣
47	〃 14年	江田島	244	中西輝政・山内健生・青山直幸
48	〃 15年	富 士	171	小堀桂一郎・伊藤哲夫・占部賢志
49	〃 16年	阿 蘇	169	中西輝政・小田村四郎

合宿教室49回の歩み

累計参加人員

一三、一二名

第四十九回 “合宿教室（阿蘇）” 全参加者の感想文と短歌詠草



とき 平成十六年八月五日（木）から九日（月）まで四泊五日間

ところ 熊本県阿蘇郡一の宮町「国立阿蘇青年の家」

参加総数 一七〇名

目次

“はしがき”に代へて	……………	理事長 上村和男	2
大学別参加者数・その他の人数の内訳	……………		5
“合宿教室”の日程表（四泊五日）	……………		6
第49回“合宿教室”のあらまし	……………		7
走り書きの“感想文”と第二回目の“短歌詠草”	……………	参加者全員	27
短歌詠草 ……合宿中の創作作品	……………	参加者全員	87
あとがき	……………		107
カメラ・レポート29枚（29ページから85ページの左頁に掲載）	……………		

“はしがき”に代へて

本会理事長・東海ゴム工業顧問

上村和男

第四十九回「合宿教室」は、「ともに語ろう。世界を、日本をそして自分を。」を合言葉に、「国立阿蘇青年の家」で開催された。北は北海道、南は鹿児島から参加した学生・社会人(百七十名)は、例年のない酷暑の下界をよそに、外輪山に囲れ、阿蘇山の中でも一際高い高岳(二五九二米)や中岳の噴煙を真向ひに望みながら大自然のふところに抱かれて自然と人生を心ゆくまで味った。

本会の「合宿教室」は、昭和三十一年(一九五六年)鹿児島県の霧島神宮で約百名が参加したのを嚆矢とする。爾来、一年も欠かすことなく、「真正な日本人いでよ」との念願のもとに、日本の歴史・文化・伝統を正しく把持する学生・青年の育成に努力を積み重ねてきた。今や「合宿教室」に参加した学生・青年は延べ約一万三千名に及び各界で活躍されてゐる。

講師としてお招きした京都大学教授中西輝政先生は、「我が国が他国と異なりユニークな点は、一つの国で一つの文明を作つてゐるところにある。文明とは人の心の形であり、歴史を動かす力の根源である。従つて、日本の国を愛することは日本人の心の形を愛するといふことであり、国がをかしくなつたら、我々の心もをかしくなる。こんな国は世界にはない」と文明史から見た持論を展開され、「日本史には深い地下水脈が流れてゐて一旦事が生ずれば地上に湧きいでて日本人の魂を揺り動かし事態を収拾する力となる」と力説された。

拓殖大学前総長小田村四郎先生は、占領目的達成のため作られた現憲法は法理論としても無効であり、「今の憲法をいくらいぢくつても良くはならない。一度は均衡のとれた明治憲法に帰る必要がある」と強調され、現在の学校教育では全く触れない祖国日本のあるべき姿や憲法改正の問題点をわかり易く話された。

起居を共にしての四泊五日の生活の中で、参加者の心に祖国日本が甦つて、班員との心の交流も進んで行つた。参加者の中には、自らの学問に取組む姿勢や、学校教育で教へられてゐることとのギャップの大きさに気づき戸惑を隠しきれない学生や、祖国日本のすばらしさに感動し、日本の為に盡すべく努力しようと決意する学生等もをり、今まで経験したことのない友情の温さ

をしみじみと感じ、学校生活では経験できない喜びを感想文の中に述べてゐる。その感想文の一部を以下に紹介する。

「大学では友人と学問の話、とくに日本人の心、日本が受けついできた文化の話をする機会など全くなかった。この合宿教室で心から語り合える友を見つけることができ、本当に有難い。」
(早大四年)

「この合宿に来る前は、ただこの国に生きていただけで、日本人として生きるなどとは一切思っていませんでした。」
(麗澤大四年)

「学べば学ぶほど自分は何とすこい国に生れたのだと改めて感じました。」
(福岡女子大三年)

幾人もの学生が祖国日本をはじめと感じた感動を述べてゐる。

日程が進み、短歌創作、天皇の御製についての講義や体験発表等を聞く中に次のやうな感想を述べてゐる。

「知識を学んでいますが、それはたゞ頭に詰め込むだけの知識であり心の学問でないことに気付かされました。」
(防大三年)

「先人の和歌や歴史に触れ、どういった風にこの国が創り出されて来たかということ学ぶことができたように思う。」
(龍谷大二年)

「最も印象に残ったことは、天皇陛下の御歌における民を思うお心遣いでした。言葉では表現できない感動を覚えました。」
(九大修士二年)

「天皇の大御心に触れられ、歴代天皇との心のつながりを感じ、我々は一つにつながっているのだという素晴らしい経験をした。」
(東大四年)

班別の短歌相互批評の際「自分の気持ちに合った言葉が思い浮かばなかった短歌を、班の人たちが僕の気持ちに合った表現に変えようとしてくれる姿を見て感激しました。」(佐賀大一年)と述べてゐる。友の友情に感激し、班員の友が真剣に考へてゐる姿が彷彿としてくる。

四泊五日と短い期間ではあるが起居を共にし真剣に一つのことを考へることで友情が生れ、共に国を思ふ同胞感が芽生えて来るのであった。現在の学園生活では味ふことのできないことが実現されてゐることを、走り書きの感想文は示してゐる。この

ことは、現下の学校教育が「祖国日本」のことをなかがしろ蔑にするが故に祖国とどう連なつて生きるかが全くわからなくなり、迷つてゐる姿が見えてくる。

なほ、こゝに編した「感想文集」は、参加者全員が帰り際の走り書きで記したため、意を尽せないところもあり、紙面の都合上全文をそのまま、載せられなかったのは何とぞご容赦いただきたい。この冊子をお読み下さつた方々がこれらの感想文の行間から、現代教育の問題点がどこにあるかをお掴みとりいただけるならば、それは私どもの望外の喜びである。

この文集の全体の編集に、十余名の会員（編集後記に記載）が休日や終業後の時間をさいて取組んでくれた。またこの合宿の運営にあつた運営委員長の酒村聰一郎さんをはじめ運営委員の方々、指揮班長の矢永誠二さんをはじめ指揮班の方々の御苦労に心から感謝申し上げます。

また最後になりましたが、この合宿事業を行ふに当り、本年もまた、朝野からお寄せ下さつた得難い御支援の数々に対し、会員一同に代り、心から厚く御禮申し上げます。

来年（平成十七年）の「第五十回合宿教室」は八月二十六日（金）～八月二十九日（月）までの三泊四日間「日本人の心のふるさと」である「伊勢神宮」で開催する予定です。「合宿運営委員長」には、本会の常務理事福岡事務所長山口秀範氏を煩はすことになりました。

来年は「合宿教室」が開催され五十周年の節目を迎へることでありますので、改めて会員各位の格段のご協力をよろしく願ひ申し上げますと共に、三百名以上の参加者を集めるべくご努力を心からお願ひ申し上げます。



第49回全国学生青年合宿教室（平成16年8/5～8/9）於「国立阿蘇青年の家」

参加者

（学生班 三十大学）（洋数字は参加学生数）

北海道大学1 東北女子大学4 東北大学1 早稲田大学9 亜細亜大学4

明星大学1 東洋大学1 東京大学1 獨協大学4 電気通信大学1 敬愛大学1

防衛大学校2 明治大学1 杏林大学1 横浜国立大学1 慶應義塾大学1

麗澤大学2 お茶の水女子大学1 東京女子医科大学1 岐阜経済大学1

桃山学院大学1 龍谷大学1 九州大学3 九州工業大学4 佐賀大学2

福岡大学3 西南学院大学2 福岡女子大学2 福岡教育大学2 長崎大学2

高校卒2 高校生1

計 六十四名（うち女子二十一名）

（社会人、教員参加者） 二十五名（うち女子六名）

（招聘講師） 一名

（国民文化研究会） 六十九名

（事務局） 五名

（写真） 一名

（見学参加者） 五名

総計 一七〇名

(社)国民文化研究会・大学教官有志協議会 主催

第49回 (平成16年) “全国学生青年合宿教室” 日程表

	8月5日 (木)	8月6日 (金)	8月7日 (土)	8月8日 (日)	8月9日 (月)
7:00		(起床) 洗面・清掃	(起床) 洗面・清掃	(起床) 洗面・清掃	(起床) 洗面・清掃
8:00	(注意) ↓ 参加者は、一班七名前後の班に所属します。会場入口受付で、所属する班を確認のこと。	朝の集ひ (国旗掲揚・国歌斉唱・体操) 班別散策 朝食 (9:00)	朝の集ひ (国旗掲揚・国歌斉唱・体操) 班別散策 朝食 (9:00)	朝の集ひ (国旗掲揚・国歌斉唱・体操) 班別散策 朝食 (9:00)	朝の集ひ (国旗掲揚・国歌斉唱・体操) 班別散策 朝食 (9:00)
9:00		古典輪読導入講義 古事記・倭建命 元九州造形短大教授 小柳 陽太郎 先生 (10:30)	講義 「憲法改正論議に欠けてあるもの」 前拓殖大学総長 小田村 二郎 先生 (10:30)	講義 「君民一和の伝統」 福岡東医療センター副院長 小柳 左門 先生 (10:30)	清掃 (10:00) 合宿を顧みて 国民文化研究会副会長 宝辺 正久氏 合宿運営委員長 山村 龍一郎氏 (10:30)
10:00		班別研修 (12:20)	質疑応答 (11:00)	班別研修 (12:00)	参加者による 全体感想自由発表 (11:30) 感想文執筆 第二回短歌創作 (12:00)
11:00	随時受付 (2:30)	昼食 (1:00)	短歌創作導入講義 福岡市立和白東小学校教諭 是松 秀文 先生 (1:00)	昼食 (1:00)	昼食 (1:00)
12:00		開会式 (挨拶) 国民文化研究会理事長 上村 和男 氏 (1:30)	第一回短歌創作 レクリエーション 昼食 散策 短歌創作 (2:30)	創作短歌全体批評 (社人短縮コース) 熊本県立宇土高校教諭 久保田 真 先生 (2:00)	閉会式 (挨拶) 国民文化研究会副理事長 磯貝 保博 氏 (2:00) 解散
1:00		オリエンテーション (合宿趣旨説明) 合宿運営委員長 酒村 龍一郎氏 (統注意伝達) 合宿指揮班長 矢永 誠二氏 (3:00)	質疑応答 (3:30) (写真撮影)	班別短歌相互批評 (短歌再提出)	
2:00		班別自己紹介 事務連絡打合せ (4:00)	班別研修 (5:30)	地区別懇談 (5:30)	
3:00		夕食 入浴 休憩 (7:30)	台湾訪問団報告 (学生) 大津健志・武田有朋 (団長) 小野吉章 (8:30) (慰霊祭の説明) 工学博士・元新潟工科大学教授 大岡 弘 先生 (9:00)	講話 国民文化研究会副会長 長内 俊平 先生 (8:30)	
4:00		合宿導入講義 「国史の清流」 大阪府立南瓊屋川高校教諭 網田 洋一 先生 (9:00)	慰霊祭 (9:30)	夜の集ひ (10:00)	
5:00		班別研修 (10:30)	班別懇談 (10:30)	班別懇談 (10:30)	
6:00		就床 (11:00)	就床 (11:00)	就床 (11:00)	
7:00		消灯	消灯	消灯	

※社人短縮コース……集合 8月6日 (金) 午後 1:00
解散 8月8日 (日) 午後 2:00

第四十九回 “合宿教室” のあらまし

第一日目

(八月五日・木曜日)

第四十九回全国学生青年合宿教室は、熊本県阿蘇郡一の宮町「国立阿蘇青年の家」において開催された。ここでの合宿教室開催は三度目である。「阿蘇青年の家」は、四方を雄大な阿蘇の外輪山に囲まれ、また前方にはなだらかな草原の広がる景勝の地に位置してゐる。中岳をはじめとする阿蘇五岳が眼前に広がる素晴らしい環境のもとで、四泊五日の合宿教室はスタートした。北は北海道から南は九州に至る全国各地から集ひ来た参加者は、長旅の疲れものともせず、受付を済ませると、ただちに宿泊棟の各班室に入り、初めて会った班員たちと挨拶を交はして、開会式に臨んだ。

開会式

九州工業大学大学院一年の結川高志君の開会宣言で合宿教室は始つた。主催者を代表して上村和男理事長は「我が国の現状は世界中で類例がないほどに国家意識を喪失してゐる。我々はその事実をしつかりと見据ゑて、そこから物事への取り組みを始めようではないか。われわれ一人一人が他に頼らず一粒の種となり芽を出すことが必要だ。祖国が無くなることほどあはれで悲惨なことはない。国とは自分にとって何であるのか。一所懸命考へる四泊五日にしていたきたい」と挨拶した。

続いて早稲田大学四年穴井宏明君が登壇。「参加されたきっかけは様々だと思ふが、勧めて下さった方々の言葉を信じ、何かを得たいといふ気持ちは皆一緒ではなからうか。今の気持ちを最後まで忘れないで合宿に取り組まう」と呼びかけた。

合宿導入講義 「国史の清流―楠正成と桑原暁一先生のこと―」

大阪府立南寝屋川高校教諭 絹田 洋一 先生



始めに先生は、サッカー日本代表の愚直なまでにフェアな戦ひ方と武士の戦ひ方には「勝敗を越えた何か尊いものを求めるといふ意味で通じるものがあるのではないか」と問ひ掛けられ、楠正成とその一族について、『太平記』の原文や桑原暁一先生がお書きになった「小歌うたひて」を紹介しながら話を進められた。

先生は赤坂城、千早城などでの正成の戦ひ方を紹介しつつ、千倍の敵を打ち破った強さや潔さもさることながら、それらの絶望的な戦ひの中で裏切り者が出なかったことを強調された。そして正成の勇猛果敢、純粹無私な生き方が敵と味方の隔たりを越えて人々の共感を呼び、その最期は生も死も超越してしまつたかのやうな不思議な清々しさが漂つてゐると指摘された。

さらに、後醍醐天皇の御製を紹介され、正成はその常に民を思はれる御心に触れ、心の奥底から揺り動かされ胸が熱くなるやうな痛切な思ひがあつたからこそ、一族の命運を懸けて戦はうと決意したのではなかつたか。知識とか理論とか、概念だけでこれほど純粹無私に生き、死んで行けるものではないと語られた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義について班別研修を行った。まづ皆で講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかつたこと、重要なことは何かを話し合ひ、さらに班員一人一人がどのやうに受け止めたかについて、話し合ひが進められた。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後にも続けて行はれた。お互ひ初対面のせるか、初めのうちは緊張して意見

も少なく発言も限られてゐたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も活発となり、時には反論し、時には共感し合ひながら、班員相互の心の交流が深められていった。

第二日目

(八月六日・金曜日)

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。今合宿の「朝の集ひ」は、「青年の家」の合同の朝の集ひに参加して、他団体と共に行はれた。すがすがしい空気の中、国旗掲揚の後体操を行つて、一日の研修を新たに迎へた。

なほ、この朝の集ひの後、合宿期間中毎朝、秀歌の紹介と鑑賞が行はれた。紹介された短歌は次の通りである。

(八月六日)

志貴皇子

石^{いは}ばしる垂水の上のさ^{わらひ}歳の萌えいづる春になりにけるかも

(八月七日)

源 実朝

道のほとりに幼き童の母を尋ねていたく泣くを、そのあたりの人に尋ねしかば、父母なむ身まかりしにしと答え侍りしを聞きて
よめる

いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母を^な尋ぬる

(八月八日)

吉田松陰

親思ふこころにまさる親心けふの音づれ何とさくらむ

(八月九日)

昭和天皇御製

ともしび

港まつり光りがやく夜の舟にこたへてわれもともしびをふる (昭和三十二年)

明治天皇御製

燈

ともし火の影まばらにもみゆるかな人すむべくもあらぬ山辺に (明治三十六年)

古典輪読導入講義

「古事記・倭建命」

元九州造形短期大学教授

小柳 陽太郎 先生



先生は、まづ明治天皇の御製「ながき夜のふけわたるまでわらはべがふみよむ声のたえずきこゆる」を紹介されて、「声に出して心で文章を溶かしてゆく、そんな読み方を蘇らせてほしい」と古典を声に出して読むことの大切さを強調された。

ついで倭建命が熊襲建兄弟を刺し殺す箇所を読まれて、「初めてこの箇所を読んで以来、残酷ではあるが、激しさの中に実に爽やかなものを感じる。文章の強さが強ければ強いほど、どろどろした、いやらしい暗いイメージがない」と話された。

命が西征から帰還直後に父の景行天皇から東征を命ぜられ「天皇、既く吾を死ねと思ほすらん」と嘆かれる箇所では、「『古事記』は道徳の書ではなく、人間の心の裡にあるがままに包み隠さず真心の表現として伝へてゐる。ここに『古事記』のすばらしさがある」と指摘され、次に弟橘比売命の入水の箇所を読まれて「捨身といふ日本人の尊く美しい生き方が日本の永い

歴史の中で民族の血として流れてゐる。日本人の生き方の本質がここにある」と話された。最後に「『古事記』を読む際は朗々と声に出して心をこめて読んでほしい」と述べてご講義を終へられた。

班別輪読

講義の後、参加者は各班に分かれて輪読研修を行った。小柳先生のご講義を振り返りながら、紹介された『古事記』の文章を、皆で声に出して読み味はついていた。古代の人たちの思想や息吹を直接感じることのできるひとときであった。

講義 「文明史から見た『日本』の回復」

京都大学教授 中西輝政 先生



先生は、「明治以来、日本は西洋文明との相違を意識してきたが、アジアの文明との違ひには目を向けて来なかった」として、中国を取り上げられた。「中国には、経済発展の『国策』以前に、領土保持、国家統一などの不変の『国是』がある」と指摘され、この観点から歴史解釈や領海問題などその対外政策を解説され、中華思想に裏打ちされた中国文明の特質を明かされた。

先生は国際関係を見る上では、国家単位だけでなく、文明の相違に注目すべきであると指摘され、「日本文明は、西洋キリスト教文明・ロシアスラブ文明・イスラム文明・中国文明などと並ぶ独立した文明で、文明とは人の心の形であって、歴史を動かす力の根源である」と述べられた。人と人との信頼に重きを置き、約束を守る、といふ日本文明の特質の一端を示された先生は「日本のユニークさは一つの国で一つの文明圏を作っている点にある。日本の国を愛するとは日本人の心の形を愛するといふことであり、国がをかしくなったら、我々の心ををかしくなるし、幸福は失

はれる。こんな国は世界にない」と力説された。

さらに明治時代を切り開いた「和魂洋才」といふ言葉を「信念と手腕」と言ひ換へられた上で、その両立が日本の回復に不可欠であるとして、「日本人は無魂無才になったといふ人もゐるが、日本史には深い地下水脈がある。元寇やペリー来航時のやうな際には地上に湧き上がってくるに違ひない」と説かれた。

講話 「経営と人育て―いのちある言葉を伝へたい―」

榎石村萬盛堂社長 石村 儼 悟 先生



まづ先生は、ご自身の人生の原点はこの合宿教室であり高校時代に恩師小柳陽太郎先生と出会ったことであると話された。そして現在福岡市の教育委員の任にあつて「実業人としての平明な常識」「人間の本性」「企業人としての体験」から発想してゐると述べられ、子供は「型にはめる」べきで、例へば「おはよう」「ありがとう」の挨拶の「型」を教へなければならぬと語られた。

また経営者としてのご体験から「守・破・離」といふ先人の教訓は「人育て」の要諦に照らしても間違ひないと語られ、三代目社長として創業百年の企業永続の秘訣について、心の伝承と実践といふことが如何に大切であるかを、お祖父様以来の「先義後利」といふ言葉を通してご紹介いただいた。自分の置かれた場所ですべて懸命に工夫を凝らし、物を考へる。そこに生れてくる言葉を次世代に伝へて行くことが私たちの大切な使命であると結ばれた。

講義

「憲法改正論議に欠けてゐるもの」

前拓殖大学総長

小田村 四郎 先生



先生は、大日本帝国憲法の制定経緯と日本国憲法の成立経緯をたどり、そこにある問題点をまづ指摘された。大日本帝国憲法はもともとわが国に存在した国柄に基づいて制定されたものであったと述べられた。大日本帝国憲法は君主主義に立脚しつつ、君民同治主義、法治主義、責任政治主義を定めるものとの美濃部達吉の見解を紹介された。

現行の日本国憲法は法理論としては無効論ないしは失効論が正しいこと、被占領下において主権を奪はれ国家意思の自由がなかった時期に成立したこと、外国人しかも占領軍が占領目的のために作成し軍事力によつて強要したもので国際法にも違反すること、帝国憲法第七十三条による改正といふ手順を経てはゐるが帝国憲法改正の限界を逸脱してゐること等を列挙して説かれた。

現行憲法の全面改正は当然であるが、差し当つては自主独立意欲を奪つてゐる「戦争放棄」の第九条、特にその二項と、改正条項の第九十六条だけであつてもやむを得ない」と述べられた。しかし先生は「今の憲法をいくらいじつても良くはならない。一度は均衡のとれた明治の帝国憲法に帰る必要がある」と強調された。先生は「昭和二十年八月十五日昭和天皇のお言葉（玉音放送）を聞いて、帝国憲法と教育勅語が存在する限り日本は必ず立ち直ることができる」と確信した」と当時を回顧され、今後の憲法改正論議は、そのことを念頭に置いて深めて行くことが必要であると締め括られた。

福岡市立和白東小学校教諭 是松秀文先生



れた。

先生は「短歌は個人の芸術ではなく、皆で心を通はせ高め合っていく国民芸術である」と前置きされた。そして日頃の短歌創作の指導を通じ、子供達から生き生きと感ずる心の大切さを学ばれてゐる御体験を述べられ、昨年の合宿教室での小堀桂一郎先生の「美しい言葉を使ひ、正しい文章を書くことによりその人の人生の内容が美しくなるのです」との御講義にお触れになつて、短歌創作に向ふ参加者を励まされた。実際の作歌上の注意としては「感動をよく見つけ、素直な言葉で、一首一文で詠んで下さい」と述べられ、「歌は人の心と心の間に架せられる見えざる橋です」と述べ講義を終へられた。

レクリエーション

短歌創作導入講義の後、班単位でバスに分乗して、レクリエーションに出発した。阿蘇山火口、草千里浜と回つて宿舎に戻つた参加者は、夕刻までの時間、指を折りながら短歌創作に余念がなかつた（二泊三日間の社会人短縮コースの参加者は早目に宿舎に戻り「班別短歌相互批評」に取り組み、占部賢志先生の講話を聴講した）。



先生は日露和親条約の締結交渉の際の露使プチャーチンと幕吏川路聖謨のやり取りを紹介され、寸土も譲ることなく国土を守り国境交渉を成し遂げた川路の聡明さと、公の仕事に取り組んだその功績の意義を説かれた。ついで任地を点々とする川路が、江戸に残した母へ送り続けた書簡や、第一回幕府派遣のイギリス留学生に選ばれた孫の太郎へ宛てた手紙を紹介され、川路の母や孫へ心遣ひと、国土を譲ることなく成し遂げた日露交渉は切り離すことができない、即ち「公と私は決して分けることができない」と話され、講話を締め括られた。

台湾派遣学生研修団報告

昨十一月実施された台湾派遣学生研修団の報告は、まづ東京大学法学部四年の武田有朋君が台湾人の教育に尽力された六士先生の姿から感じた現地の人々と心を通はせる国際貢献のかたちについて見聞を踏まえて報告し、次に九州工業大学情報工学部四年の大津健志君が蔡焜燦先生のお話に「国を愛する心」の大切さを強く感じ歴史を学び受け継いで行くことの意味を痛感したと報告した。

学生団員二人の発表の後、小野吉宣団長が登壇。お会ひした蔡焜燦先生が台湾を日本と同じやうに思はれた明治天皇の御製「新高の山のふもとの民草も茂りまざるときくぞ嬉しき」をこゝく自然にお話の中で語られたことを紹介。今でも心に残って生きてゐるものが歴史であると語られた。飛虎將軍廟、烏山頭ダム。宝覺寺での慰霊祭等々での見聞を報告され、大日本帝国の軍人・軍属として出征された方々が今でもそれを誇りとして生きてをられる姿に深く感動した旨を話された。台湾を西洋的カテゴ

リーの植民地として捉へるのではなく、現地を見て台湾経営に力を尽した先人の心を私達の胸に受け止めなければならないと話された。

慰霊祭

平時戦時を問はず祖国のために生涯を捧げられた全ての祖先のみ霊をお祀り申し上げる慰霊祭は、先立って、まづ元新潟工科大学教授の大岡弘先生から祭儀の意味について懇切な解説がなされた。その後、夜の阿蘇高原の一隅にしつらへられた齋庭に移動。藤新成信理事が御製を拝誦し、坂東一男常務理事が祭文を読み上げた。上村和男理事長、後援の産経新聞の対馬好一氏が拝礼の後、参加者は酒村聰一郎運営委員長に合せて二拝二拍手一拝の拝礼をし、最後に「海ゆかば」を斉唱した。簡素な中にも参列者の心が一つに融合したやうに感じられる厳肅な時間だった。

左は奏上された「祭文」と拝誦された「御製」である。

祭文

ここ大阿蘇の山ふとところにいだかれし 「国立阿蘇青年の家」に集へる 社団法人国民文化研究会 理事長上村和男をはじめ我ら百六十余名 第四十九回全国学生青年合宿教室にて研鑽をかさね はや三日目の夜を迎へぬ 理事長上村和男
今し天つ日はかくろひ 涼風すずかぜのさやけき今宵さ霧ただよふ 麗しき草原を齋庭と定めまつりて とこしへにみ国を守りましませる遠つみ祖達をはじめ み国のために尊きみ生命を捧げましし あまたのはらから達のみたまを招きまつりまして
海の幸山の幸くさぐさを供へまつりて み祭り仕へまつらむとす

顧みれば 混迷を極めたる時代に 故小田村寅二郎大人命を先頭に日本国民としての大道を求め 祖国日本の真正なる獨立を果たさむと合宿教室を営み はや四十あまり九とせを重ねたり

我が国の政治 教育 マスコミ角界の混迷いまだ晴れたりとは言へねど 戦終りて五十年余にして外国の厳しき圧力にもめげず 新しき動きのみえはじめしはかしこきことなりき

憲法改正 教育基本法の改正の動きもやうやく具体化し 大きなうねりにならむとの新しき局面を迎へ 我が国民文化研究会に寄せられし期待の大きさを覚ゆる今日 来年 国民文化研究会創立五十周年を迎へむとする

神代より定まれる道 この道をさまたぐる者は力の限り打ち払はむことを ここに謹みて祈り誓ひ告げまつらむ

我れら四十九年を連ねて営みきたれるこの学びのには相集ひ 中西輝政 小田村四郎両先生をはじめとする御講義に耳を傾け 天皇の大みうた古事記の輪読に はたまた短歌の創作に心を開き心をかたむけ語りかはしつ み祖たちの尊き

み言葉を学び 老も若きももろともに心を鍛へ言葉を修め わが国の良き伝統を学び ともに祖国のいのちを担ふべき友がらとなり み祖たちに連なりて祖国日本をとことはに栄えゆかしめむと誓ひまつらむ

畏かれども汝み祖たちのみ霊よ 願はくはこの麗しきやまとしまねの内外に満つるまがこと打ちそけ み国のゆくてを守らせたまひ 我れらが上をみそなはし導きたまへと参加者一同に代はり 坂東一男 謹み敬ひ恐み恐みも白す

平成十六年八月七日

御製拝誦

明治天皇御製

天

すめるもの昇りてなりし大空にむかふ心も清くぞありける

をりにふれて

おのづから仇のこゝろも靡くまで誠の道をふめや國民くにたみ

をりにふれて

國のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

歌

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり

蟲聲非^ズ一

さまざまの蟲のこゑにもしられけりいきとしいける物のおもひは

昭和天皇御製

暁鶏声

ゆめさめて我世をおもふあかつきに長なきどりの声ぞきこゆる

連峯雲

峯つづきおほふむら雲ふく風のはやくはらへとただいのるなり

奈良にて

大き寺ちまたに立ちていにしへの奈良の都のにほひふかしも

引揚者に対して

外国とらくににつらさしのびて帰りこし人を迎へむまごころをもて

国民とともに心をいたためつつ帰りこぬ人をただ待ちに待つ

今上天皇御製

昭和天皇を偲ぶ歌会 御題 晴

父君を見舞ひて出づる晴れし日の宮居の道にもみぢばは照る

昭和天皇崩御後初めて明治天皇例祭に参りて

今の世の国の基の築かれし明治の御世とふとを尊とふとみしのぶ

西安

いにしへの我が国人くにびとの踏みし地を千年ちとせを越へて我ら訪おとふ

歌会始御題 歌

人々の過しし様を思ひつつ歌の調べの流るるを聞く

英国訪問

戦ひの痛みを越えて親しみの心育てし人々を思ふ

講義 「君民一和の伝統」

国立病院機構福岡東医療センター 副院長 小柳 左門 先生



先生はまづ「日本には、人々の心を大切にしておいて人々と共に生きるといふ国柄が、記紀万葉の昔から現代まで受け継がれてあります。これを一緒に辿って行きませう」とお述べになつて講義を始められた。

『日本書紀』から仁徳天皇と弟君が互ひに皇位を譲り合はれ最後に自ら死ぬことで兄君に譲られた物語や国見の煙の話、また『万葉集』の舒明天皇の御歌に触れながら説明された。続いて聖徳太子の御子である山背大兄王の御最期を『日本書紀』に辿られた。ここで、「夫れ身を捨てて国を固めば、

亦丈夫にあらずや」といふ山背大兄王のお言葉は、今の天皇様にまで一貫して受け継がれてゐる御精神であり日本の国柄なのですと語られた。また仏教が入つてきて捨身無私の心が育まれたのではなく、無私の精神が既に日本に在つたからこそ仏教の精神が今日に至るまで根付いたことに注目してほしいと話された。

先生は鎌倉時代から今上陛下に至る十五代の天皇の八十首のお歌を抄出され、歴代天皇の御心を御製によつて辿られた。ことに終戦時の昭和天皇の御製に涙を堪えきれず壇上で絶句された先生の姿は若き参加者に強く印象付けられた。さらに左記の今上天皇のお歌を紹介された。

阪神・淡路大震災

なみをのがれ戸外に過す人々に雨降るさまを見るは悲しき

「このやうに国民の上を想はれる君民一和の伝統は、今上陛下にも受け継がれてをり、私達もこれにお応へするやうな生き方

を考へたいものです」と述べて講義を終へられた。

創作短歌全体批評

熊本県立宇土高等学校教諭

久保田

真 先生



先生は、担任するクラスで生徒に短歌を詠ませ、生徒たちと一緒に短歌を味はって来られた体験から、率直にしかも正確に詠むこと、相手に伝はるやうに詠むことを中心に批評を進めて行かれた。各班の参加者が詠んだ短歌を例示しつつ、作者の気持やその情景を推し量りながら表現の正確さについて丁寧に添削して行かれた。時をり笑ひが起り、楽しく和やかな雰囲気の中で進められた。先生は学生時代の経験を振り返り相互批評に際しては、作者の心を理解することの難しさ、皆で心を寄せ合つて適切な言葉を選んで行く楽しさ、自分の心にぴったりの表現を見つけた時のうれしさ、班員と共に感したときの喜び、等々を体験して欲しいと述べられた。

班別短歌相互批評

全体批評の後、各班に分かれて短歌相互批評が行はれた。歌をつくつたのは初めてといふ参加者が多かったが、皆、一人一人の歌に心を寄せて、作者の思ひに沿った正確な表現を求めて心を砕いていった。人の思ひを正確に受け止めること、自分の気持ちを伝えることが如何に難しいかを実感させられたが、お互ひの心が通ひ合ふ充実したひとときであった。

元電源開発環境立地本部長代理 長内俊平 先生



先生は、まづ黒上正一郎先生はこの合宿教室の道を開いた方で『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』といふ御本の著者ですと語られ、若き日の学生・副島羊吉郎先生（のち佐賀大学教授）が、黒上先生にお会ひした折に、黒上先生が拝誦された明治天皇御製に感極まられた出会ひの場面を紹介されて黒上先生のお姿を偲ばれた。

「黒上先生の学問の秘訣は日本の国体を体現なさつてをられる聖徳太子の御言葉と明治天皇の御製を、皆と一緒に誦へつつ、信解、体解の世界を実現しようとするところにある」と、先生はご自分の体験をも交へながら貸し借りのできる「知解」のレベルとは異なる「信解」の世界、それは自分自身の心の中に蓄へることしかできない「体解」「信知」の学びの世界につながるものであると諄々と説いて行かれた。

次に黒上先生の友人梅木紹男さんを偲ばれつつ、学問における友情の大切さを話され「この合宿教室の基もとがそこにあり、命を分け合ふやうな友達を得て帰ってもらひたい」と述べ話を終へられた。

夜の集ひ

合宿は最後の夜を迎へ、緊張した研修の日程をこなしてきた参加者はお茶菓子と冷たい飲み物にくつろいだ時を持った。班ごとに、大学ごとに出し物が続き、しばし講義室は笑ひの渦に包まれた。

合宿を顧みて

最初に登壇された宝辺正久副会長は、合宿導入講義やその後の各講義・講話において我々の祖先が残した和歌や古典の文章が我々に示されたことを指摘され、「ここに本当の日本を蘇らせる学問の第一歩がある」と述べられた。更に、独立宏遠なる文明を持つ日本がもう一度立ち上がるためにもその中核にある「国語（日本語）」によって述べられてゐる日本の思想」に立ち返る必要があると語られた。

続いて登壇の酒村聰一郎合宿運営委員長は、昭和三十六年月刊『国民同胞』の発刊に当って、故小田村寅二郎理事長が不退転の決意と捨身の信念を以て「国民同胞の波動と拡大」を決意されてゐることを紹介し、「ここで学んだことを、一人の日本人として、一人でも多くの周りの人に伝えてゆくのが私達に与へられた使命である」と今後の精進努力の出発点にしたいとの思ひを訴へられた。

参加者による全体感想自由発表

挙手して壇上上がった参加者はこもごも胸の裡に渦巻く思ひを発表した。「古典の文章から先人の心に触れることができた」「疲れたが爽やかな感じだ」「御製に国民を『おほみたから』と呼んだ大御心を知って嬉しかった」「終戦時の昭和天皇のお歌に驚いた」「歴史の真実を知る、見つめる感性を身につけたい」「頭の理解だけでなく心底からわかることの大切さを感じた」「本当の日本人に出会へたことを感謝したい」「心から語り合へる友との出会ひも嬉しかった」等々……。

閉会式

いよいよ閉会式を迎へた。まづ主催者を代表して磯貝保博副理事長は「この合宿教室は本来の日本を学ぶ教室である。しかも寢食をともにする教室である。」「合宿教室は四泊五日で今日を以て終るが、九月から各々の地方で勉強会があるのでまた積極的に参加して欲しい。平生の過し方こそ大事だ」と今後の研鑽を期待したい旨の挨拶をした。

続いて早稲田大学教育学部三年の小林由香利さんは「最初のうちは班長としてやって行けるか心配だったがだんだん打ち解けて心を通はせることができた。この経験を大事にして行きたい」と参加者を代表して感想を語り、九州工業大学情報工学部二年の林祥人君が閉会宣言をして第四十九回全国学生青年合宿教室の全日程を終了した。

助言者の紹介

元学校法人 拓殖大学 総長	小田村四郎	日章工業(株) 代表取締役社長	藤新 成信
(社)国民文化研究会 理事長	上村 和男	元佐賀県立佐賀商業高等学校 教諭	末次 祐司
(株)宝辺商店 相談役	宝辺 正久	稲田事務所	稲田 健二
元九州造形短期大学 教授	小柳陽太郎	元日立製作所	日高 廣人
新日本製鉄(株) (嘱託)	今林 賢郁	元キュービー(株)	山本 伸治
大日本園芸(株) 代表取締役社長	磯貝 保博	富山県立富山工業高等学校 教諭	岸本 弘
元電源開発(株) 環境立地本部本部部長代理	長内 俊平	国立病院機構福岡東医療センター	小柳 左門
元アサヒ飲料(株) 専務取締役	坂東 一男	神奈川県立小田原高等学校 教諭	原川 猛雄
拓殖大学日本文化研究所 客員教授	山内 健生	亜細亜大学 法学部教授・文学博士	東中野修道
(社)国民文化研究会 事務局長	山口 秀範	産経新聞社	大内 保治
元日産自動車(株)	古川 修	湯亭こんや 代表取締役社長	青砥 誠一
福岡県立稲築志耕館高等学校 教諭	小野 吉宣	防衛庁	鏗 信弘
元新潟工科大学 教授	大岡 弘	羽後信用金庫	須田 清文
中島法律事務所 弁護士	中島 繁樹	防衛庁技官	山根 清
熊本市環境保全局環境事業部減量美化推進課	折田 豊生	大牟田市立勝立中学校 教諭	西原 正博
(株)石村萬盛堂 代表取締役社長	石村 僊悟	鳥栖市役所	西山 八郎
福岡県立太宰府高等学校 教諭	占部 賢志	福岡市立松島小学校 教諭	奈田 明憲
伊佐ホームズ(株) 取締役社長	伊佐 裕	(株)I H I エアロスパス	内海 勝彦
熊本県立東稜高等学校 教頭	白濱 裕	福岡県立福岡中央高等学校	藤 寛明
山口県立下松高等学校 教諭	宝辺矢太郎	大阪府立南寝屋川高等学校 教諭	絹田 洋一
(株)みずほコーポレート銀行	小柳志乃夫	北九州市立医療センター 放射線技師	森田 仁士
福岡県立香住丘高等学校 教諭	酒村聰一郎	日産自動車(株)	福島 徹男
		熊本製粉(株)	吉村 浩之
		福岡県立小郡高等学校	矢永 誠二

公務員

福岡市立和白東小学校 教諭

熊本県立御船高等学校 教諭

(株)アルバック

(株)日本教文社

(有)須田商事

熊本県立宇土高等学校 教諭

藤村酒造(株)

神奈川県教育庁 総務室

ハローワーク福岡南

(有)岡山商事

(有)HITOエンタープライズ

民主党鳥根県総支部連合会

(株)国民文化研究会

中尾スタジオ

熊本市教育委員会

東洋紡績(株)

日本青年協議会

日本青年協議会 学生局

企画デザイン工房banup

福岡県立久留米高等学校 講師

(株)ラック

横浜市なしの木学園

神谷 正一

是松 秀文

今村 武人

北浜 道

坂本 芳明

眞田 博之

久保田 真

藤村 孝信

大日方 学

古川 広治

岡山 英一

三林 浩行

濱口 和久

茅野 輝章

中尾 国博

濱口 知久

庭本秀一郎

外村 聖典

別府 正智

諏訪田尚子

小林 国平

高橋俊太郎

徳田 浩介

合宿運営本部

指揮班

事務局

酒村聰一郎・鏡 信弘・今村 武人

矢永 誠二・濱口 知久・庭本秀一郎

小林 国平・高橋俊太郎・徳田 浩介

奈田 明憲・山本 伸治・藤 寛明

学習院高等科二年 小田村康正

県立鳥栖高等学校二年 西山将太郎

文華女子高等学校一年 神谷彩由美

福岡舞鶴高等学校一年 廣木 文屋

藤沢市立大清水中学校二年 工藤晋太郎

森田 仁士・原川 猛雄

中尾スタジオ 中尾 国博・大坪 あい

熊本県芦北教育事務所 眞田 誠一

福岡県立三井高等学校 教頭 小林 至

公務員 村山 健司

主婦 庭本和香子

浜田醤油(株) 代表取締役会長 浜田 定勝

写真班

見学者

走り書きの感想文集

これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のまま掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものであります。



第一班—男子学生—

良い友ができた

(東洋大学 文 二年 野中哲朗)

私は初参加のこの合宿教室で、正直言つてこんなにも充実感を得られるとは思いませんでした。たくさん先生の方の御講義を聴かせて頂き、班別研修で班員の皆と意見や感想を言い合う中で、「日本」のことをこれほどまでに愛し、考えている日本人がいることを知り、自分の未熟さを感じさせられました。私の考えも一人の日本人の考えとして受け取って頂けたのだと思い、ほっとしました。さらにこの合宿で、良い友が出来たということが最も心に残りました。来年も参加したいと考えております。

四日目の夜にて

別れの前寝るのが惜しく友たちと語らひ笑ひ夜は更けゆく

有意義な合宿でした

(九州工業大学 情報 修士二年 真崎浩一)

阿蘇での合宿の経験は今回で二度目となります。一度目は高校での勉強合宿でありました。しかも、その時に担任して

頂きました酒村先生が、今回の合宿の運営委員長をお勤めとすることで、人の縁といふものを感じつつの参加となりました。私は普段、物事を頭でとらへることが殆どでしたので、今回の合宿では率直に言葉を受け止めるやうに心がけました。しかし、特に構へずとも、古典の文章は美しく、心にすつと入つてきて、様々な感動を与へてくれました。また和歌創作も今回が初の体験であり、自分の心を文字に表す難しさに頭を悩ませましたが、相互批評を通して満足のゆく歌ができました。

四泊五日といふ短い間でしたが、大変有意義なものでした。

閉会式の感想発表にて

壇上の友の思ひを受け止めてその志こそ頼もしきかな

短歌相互批評に感激した

(佐賀大学 文化教育 一年 吉田達郎)

今回は初めての合宿参加で、始めはとても緊張しました。班別研修の時間以外は話したりすることがあまりなかったのですが、それでも一班の人たちに出会えてよかったです。それは特に短歌相互批評の時に感じました。

僕が第一回短歌創作の時に作った短歌は、自分の気持ちに合った言葉が思い浮かばなかったので、正直納得できるではありませんでした。その短歌をより僕の気持ちが表されているものにするために、班の人たちが僕の気持ちを聞き、

気持ちに合った表現を考えている姿を見て、本当に感激しました。班の人たち、また班付の先生方のおかげで僕の短歌がより僕の気持ちが表されたものとなり、とてもうれしかったです。

短歌相互批評の折に

我が短歌をよりよくせむと考へる友に会へしことうれしく思ふ

友達一人誘って来年も参加しよう

(早稲田大学 法 四年 濱崎史嘉)

私は合宿に三回目の参加となるのですが、初めて参加する人達がどんな気持ちで合宿を終えるのか、できればいい感情を持つて帰って欲しいなと思っていました。私達一班は班別研修以外にはあまり先生方のお話について熱く語ることはなかったのですが、いろんな楽しいお話をしました。そして最終日に、初参加の班員の方々が「合宿楽しかったよ」「来年もまた来たいです」など私の方がうれしくなるようなことを言ってもらってとても良かったと思っています。

来年は五十回という節目の合宿になるのですが、今回合宿に参加した学生は、感動の心を持ったならば、また来年もその感動をいろんな人々に伝えるように、友達一人でもいいから誘って参加して欲しいと思います。

夜に一班の友達と語りて

研修の話はあまりしなくても我らの心は一つになれり



合宿初日受付。これからの四泊五日に思ひを馳せる。

言葉では表現できない感動を受けました

(九州大学 芸術工学 修士二年 世利喜裕)

今回、初めて参加しました。きっかけは、私が尊敬する方から「合宿に参加しなさい。今まで私のいったことで間違っていたことはあるか」といわれ、「ごさいません」とのやりとりによって決断しました。しかしながら、合宿の目的を知ったのは、そのやりとりが終わってからでした。おそらく、私が柔道をしており、日本国に対する気持ちを感じておられたのでしよう。多くは語らずとも私に声をかけていただいたことを深く感謝致します。

さて合宿に参加して歴史知らずの私は只只驚き、無知ながらも、抵抗なく受け入れることができました。これは、私の中に眠る「日本人の心」が目覚ました瞬間でした。最も印象に残ったことは、天皇陛下の御歌における民を思うお心遣いでした。言葉では表現できない感動を受けました。

また一班のゆかいな仲間達と語り、一緒に笑い過ごすことができましたことは、志を共にする仲間との貴重な体験でした。

最後に、このような素晴らしい機会を提供、支援してくださった皆様方に深く感謝いたします。

第四十九回全国学生青年合宿教室に参加して

初参加右も左もわからずに班員たよりについてゆきけり

危機にいかにかふるまうか

(東北大学 教育 博士三年 大岡一巨)

危機的状况にあつて日本人はいかにかふるまうか、その手本に触れる機会をこの合宿で得た。自分自身が現に感じてきた危機は、突きつめれば自分自身の空虚さにあると、これまで思っていた。しかしそんなことを言えばちが当たるということも教わった。班付の小野先生が、「おしっこのしつけ」をはじめとする母親からの教えというものがあると教えてくださった。それらがあるから今の君たちがあるのだと。長内先生は「感じさえすればいいんだよ」とおっしゃった。全体感想発表を聞きながら、まるで言葉がわが身を突き抜けるような感動を覚えたり、自分より若い人たちの気負いを感じたりした。油断しないことと気負うことは違うのではないかと私は思い始めている。

文かはせし寺澤兄のことを思ひ出して

合宿のレジュメのコピーを送りたしあまたの書き込み記したれども

吉田兄に

きびきびと靴をそろへる御姿に筋通る見ゆ体解なるかな

日本の素晴らしい所を見つけて欲しい

(明星大学 日本文化 三年 宮地順造)

私は今回二度目の合宿参加といふこともあつて、心に餘裕を持つて参加し、活動できたと思ひます。正直言ふとこの合宿は疲れます。しかし、その疲労は、例へていふなら苛酷な山の頂上に着いた時のやうな、心地の良い疲れであります。今回も多くのことを学び、新しく出會つた友とも多くのことを語りました。この貴重な體驗を忘れずに、又濱崎さんが感想発表の時におっしゃられたやうに、一人でも多くの、まだ合宿に参加してゐない友人を誘つて、少しでも多くの人にこの合宿を通して日本の素晴らしい所を見つけて欲しいと思ひました。

閉會の折に

楽しくも苦しくもありし夏合宿つひに終はりて口惜しきかな

“真の友”について考えていきたい

(亜細亜大学 法 三年 佐野宜志)

合宿中、「真の友つて何だろう」とずっと考えていました。開会式の学生挨拶で、穴井宏明先輩が、人の話を聴くのは手紙を読む姿勢と似ている、というお話をされました。友人や恋人の手紙を読む時、その文章から相手の気持ちを想つて、心をたくさん使つて、相手の声が聞こえてくるように読む。



主催者を代表して(社)国民文化研究会理事長 上村和男先生が「祖国が無くなるほどあはれで悲惨なことはない。国とは自分にとって何であるのか、一所懸命考へる四泊五日にして頂きたい」と挨拶された。

話を聴くのもそれと同じように難しい、というお話でした。

私はこの言葉を解ったつもりでいましたが、よく考えてみると、自分は相手の気持ちを想う努力をしていなかったのではないかと気付かされたのです。真剣に心を尽くしていなかった自分が、悔しくて仕方ありませんでした。

穴井先輩が投げ掛けられた問題に、時間がかかろうとも、私は応えていきたいと思います。

バスで帰る友らを手を振つて見送る

見送りしバスの遠くへ消え去れば名残惜しさのこみ上げて来ぬ

歴史を流れる清流

(日本青年協議会 外村聖典)

今回三年ぶりに参加したが、大変内容が充実してよかった。特に小柳陽太郎先生から倭建命のお話をいただいたことが心に残った。倭建が死ぬまぎわまで歌を詠まれたことに感動し、夜久先生の御文章にあるように「死ぬ最期まで力いっぱい努力を尽くして、そして死んでゆく」そういう生涯を古代の日本人は尊んできたことに心を打たれた。そのような生涯をつみ重ねつみ重ねきたことが、日本の歴史を流れる清流であって、我々が汲み上げていくべき日本の文明、文化だと思う。

また、小柳左門先生のお話の中で、菟道稚郎子と仁徳天皇のお話にも心が揺さぶられた。たぐいまれな仁徳天皇の大御

心というのは菟道稚郎子のかなしきいのちを背負っておられることを知り、「皇祖皇宗の遺訓」の重みと尊さが増して感じられたように思う。日本人の心の中に「捨身」という伝統が流れているのは不思議に思われ、また清流と思われてならない。

倭建命崩りましぬ話を聞きて

息とだゆ間際にうたひたまひける言の葉清き流れ織りなす

第二班—男子学生—

「君臣一和」を初めて実感した

(東京大学 法 四年 武田有朋)

合宿に参加する毎に、この合宿が好きになっていく。私にとって三回目の合宿であるが、一回目より二回目、さらに今回と、どんどん楽しさが増してきているような気持ちがある。

それはきつと、ここで得たものを心から信じられるようになったからだろう。先生から頂いた言葉、友と交わした言葉は、今となつては宝物である。多くの人々の真心に触れ、真心を持つて人に向かいあえる心地よさは、ここで初めて知ったものだ。今年もまた新しい友を得、また昨年同じ班に所属していた友と再会する喜びはたまらないものである。

今年は男子二班に所属したが、講義後の班別研修、短歌相

互批評において、また毎晩遅くまで横になりながら、己のありのままの心をさらけ出し、とことん語りあえた。毎回の合宿で感じることなのだが、たった四、五日過ぎただけなのだが、終わってみると、班員が昔なじみの気のおけない友であるように感じている。信じあい、つながりあえる友を得られることこそ、この上ない喜びである。

また、今回は天皇の大御心に触れられ、歴代天皇との心のつながりを感じられたことも素晴らしい経験だった。「君臣一和」を初めて実感したのだが、それを感じたとき、言い様のないあたたかさを感じた。それはちょうど家族や大切な友人と心安らかに過ごしている時のものと同じような感覚だった。理屈抜きに「我々は一つにつながっているのだ」と感じられた。昔は国民全体でこのような気持ちを共有していたのだろうか。そうであるならば、日本は本当にあたたかな国だったのだろうか。そして、国文研が居心地のよい空間であるのも、皆さんがこの気持ちを皆で分かちあっているからなのだろうか。

今回も素晴らしい友との出会いがあった。このむつびをこれからも大切に、学んでいきたい。

閉会式にて

友どちの背筋をのばして歌ひたる君が代の声に元氣湧き出づ



参加者を代表して「四泊五日元氣に取り組もう」と挨拶する早稲田大学法学部4年 穴井宏明君。

友と本音で語り合つた

(長崎大学 教育 五年 竹下博喜)

「友」という言葉がこんなにも美しく有り難い言葉だったのかとしみじみ感じました。この合宿には、班員が本気で相手の言葉を正す空間がありました。最終日の夜に、班員が集まって話をしたとき、ある学生が「食堂で、韓国人のいる前で、竹島返せといきなり言うのはよくないと思う。」と発言しました。その後、ていねいに話をしていく中で、誤解だったことがわかりましたが、その発言をした学生が「言わずにはおれなかつた。それは自分もすつきりしなかつたし、そんなこと言つて欲しくなかつたし、そういう言い方で本当に竹島問題が解決するとは思わなかつた。」と最後に発言しました。僕は、本当に素晴らしいなと思いました。自分と、友と、国のことが一つに連なっている。一体となつていると感じました。

「語り合おう。世界を日本を、そして自分を。」このリーフレットの言葉には、抜けている言葉がある。それは、「友」であることがはつきりと分かりました。友と語り合う喜び、それは、班員同士ではなく、先生方もそうです。長内先生が、僕たちを「友」と言つて下さる。たつた四日間でしたが、こんなにも多くの人が一体となる。友となる。これが「日本」であるなと思つた。ここに集まつた友がこれからの自分にとって大きな力となつていくだろうなと思う。

最後になるが、最終日にこのような空間ができたのは、やはりそれが国文研合宿だったからであろう。ただの四泊五日の合宿であれば、十日たつても、このような関係にはなりえなかつたはずだ。力不足で消化しきれない講義もあつたかもしれないが、しかし、先生方の願ひ思いが、私達を変えてくたさつたと思わずにはいられない。本当に有り難うございました。

夜ふけまで友と本音で語りひて味はひし喜び我は忘れじ

率直に話し合せて楽しかつた

(早稲田大学 法 四年 川尻善之)

国文研の合宿に参加する前、「めんどくさいなあ」というのが正直な気持ちでした。私はどういう合宿なのかということが、ほとんどわからない状態で参加しました。講義は全ておもしろいとはとても言えませんでした。高校で日本史や古典を学んだ以上のことまで突っ込んで話される講義は、多少楽しみながら聴きました。

講義後の班別研修では、日本のことについて何も考えていない私も率直な発言ができ、日本について考えている班員の話聞くこともできるなど、皆で活発な討論が展開され、楽しかつたです。特に最後の夜に、班員と腹を割つて話ができ、良き親友ができたなど実感しました。

腹を割り夜遅くまで話しうる友こそ眞の親友ぞと思ふ

「日本」の再建に尽くしたい

(獨協大学 経済 三年 菊間 翔)

戦後の我が日本國は、國家としての自信と誇りを失つてゐる。今こそ、私達若き學生が立ち上がり、それこそ草の根運動的であつても一人一人が「日本」といふ祖國をよく知り、愛し、日本民族の先輩達が、それこそ命を賭して、必死の想ひで護つて下さつた「日本」を再建しなければと切実に思ふ。特攻隊員の方々が「後を頼む」と言ひ残して、命を國に捧げられたことを思へば、それは今現在に生きる我々の義務であると思ひます。

そんな中、今回合宿には星野先生のお誘ひがあり、参加することを決しました。自分は今まで日本の心ともいふべき短歌を勉強してをりませんでした。我が二班の仲間達のおかげにより、よき歌を詠むことが出来ました。

我が所属する二班は、班長武田有朋、竹下博喜、川尻善之、中島誉主也、林祥人、青木俊憲、新垣貞治といふ、どれも個性の強い曲者・強者ぞろひの班でありました。今回初の合宿でしたが、班の仲間は、自分の「財産」です。最後の夜、皆で日本について、二時三時まで熱く語らひました。これが一番心に残つてをります。皆、住むところは違へど、心は通じ合つてゐる！ また逢はう！ 皆最高だ！

日本國の誉れの高き日の丸と君が代と共に國づくりせむ
先達の熱き思ひを胸に秘め同志と學びてけふもゆくらむ



オリエンテーション。合宿運営委員長 酒村聰一郎先生(右)から合宿趣旨説明。指揮班班長 矢永誠二先生(左)から諸注意がなされた。

「日本には地下水脈がある」

(電気通信大学 電気通信 三年 中島登主也)

中西先生は、「日本には地下水脈がある」と言はれた。そして歴史的に見て、国難時にはこの地下水脈から脈脈と湧き出る日本人の文明の力のようなものがあると学んだ。

今合宿で、友らと語らふうちに、今まさに、この地下水脈から何かが湧き出ようとしているのを感じた。今はまだ阿蘇中岳噴火口のように、煮えたぎっているだけである。しかし、近いうちに火柱を立てるように爆発しそうな熱を内に秘めている。

これまで、日本の将来に悲観的な感情しか持てなかつたが、今は、これお互いに未だ熟していない友らと共に学ぶことが、国の将来の希望につながっていることを感じ、うれしい。

― 自らの言葉の未熟さ知りたれど語らずにはをれずこのよるこびを

合宿に参加してうれしかった

(九州工業大学 情報工 二年 林 祥人)

今年合宿に参加して最も強く感じたことはうれしいという思いでした。残念ながら今年は途中からの参加となったのですが、やはり途中から見ず知らずの人達の中に入っていくのは不安がありました。しかし、実際に着いてみると班員達はすごく暖かくむかえてくれました。それだけでも今年来てよ

かったなあという思いになりました。

この合宿、いろいろな先生方の本当に気持ちのこもった御講義を聞くことができるのも、とてもうれしいことですが、それ以上にその講義の内容について、また自分達の思いについて心から語り合える友がいる、そのことが一番うれしいことだと思えます。そしてそんな友と共に学びあい、輪読し、語り合うことこそが、長内先生が話された体解、心解といったことにつながるのだと思えます。

たった四泊五日という短い間ですが、その間に多くの感動があつたと思えます。その感動というのは自分の心から湧き出た、すなおな気持ちだと思えます。その気持ちがあるからこそ、自分達はもつと日本のことを知りたいと思ひ、もつと先人の言葉を知りたいと思えるのです。そういった気持ちを大切にしながら、これからも古典の輪読を続けてゆき、また来年この合宿で心の底からみんなと語り合いたいと思ひます。

小野先生の台湾訪問団の報告を聞き

先生の熱き話に胸うたれ訪台の思ひ出自然とあふるる

忘れかけていた感動

(亜細亜大学 国際関係 一年 青木俊憲)

正直、この喜び感動に、もう言葉はいらさない気持ちです。書きたい事は、言いたい事は、ここにおさまりません。頭の中は友との語らいのことで一杯です。残された時間で、まだ

「何か伝えられるのでは、学べるのでは……」と別れの時間を惜しんでいます。

一つ思うのは、僕らは、いや僕はこの感動をいつから忘れていたのだろうか？ 人間関係に慣れ、適当な関係の中で、何か大切な何かを失いつつあったのではないだろうか？ 子供だった頃の気持ちをなくし、つまらない大人になりつつあったのではないかと思いました。この度、僕のような者が合宿に参加させて頂きました事を有難く思います。

僕は、次に皆様とお会いする時、また新たな疑問を持ち、何かを求めているかと思います。皆様もそうかと思っています。その時は、ぜひまた宜しくお願いします。

なんだろうと課題持ちつつ来たる阿蘇何かをつかみまた旅に出る

真心をぶつけあった

(新垣貞治)

班員の一人一人が熱いものをもってきていて、非常に濃密な合宿になったというのが私の率直な感想です。熱いものをもっていると言うと、常に日本のことを考え力強い言葉で日本や自分のことを語り出しそうな男子学生をイメージするかも知れませんが、二班の、特に川尻善之、菊間翔、青木俊憲の三名は違っていました。暇さえあれば、不真面目な話ばかりしているのですが、班別研修になると、思ったこと、感じること、分らないことをどんどん発言する。そして納得し

カメラ・レポート5



合宿導入講義。大阪府立南寝屋川高校教諭 網田洋一先生は楠正成の想いを語られ、「勝敗も生死も超えて何か尊いものを求める純粹無私な生き方があるのではないか」と問ひかけられた。

たことには深く頷き、納得できないことには決して妥協せず追究することを止めません。この三名以外の武田有朋、竹下博喜、中島誉主也、林祥人の四名も豊かなユーモアと思い遣りがあり、自分の持てるもの、持たざるもの総てをさらけ出し真剣に切磋琢磨し合うことができました。

合宿を終へて

真心をぶつけあひたる班友は我が真心の一部になりぬ

充実した学生との四泊五日

(関日本教文社 坂本芳明)

今回、合宿教室に班付として参加させていただいたことに感謝しています。自分のためというより、学生たちのために出来るだけの手助けをしたいとの思いのもと、例年以上の真剣さで合宿に取り組むことができました。講義の内容を一言ももらさじと聴いたこと、班別研修で学生の発言に心をくだいたこと、深夜まで班員の学生たちと語り合ったこと。本当に充実した四泊五日でした。

合宿中、学生たちとの交流がうれしく、そのうれしさを口にするのが、何かもつたいないような気さえていました。その気持ちを心にじつとかみしめたような気分だったので、縁あって同じ班となった学生たちに感謝しています。この学生たちとこれからも学びを深めていければと思います。

講義等で、今回特に感銘を受けたのは、絹田先生が紹介さ

れた楠木正成の生き様、班別短歌相互批評、最終日の全体感想自由発表でした。「太平記」を輪読する中で、楠木正成の後醍醐天皇への言上にあつたよるこびが感じられたこと、班の短歌相互批評に参加していた宝辺正久先生の気魄のこもる御指導（先生は、そのことを「合宿を顧みて」の中で「戦ひ」と表現された）、そして涙ながらに「海ゆかば」を歌ったよろこびを語る学生の姿等々。これらのことは、これからも決して忘れることはないと思います。ありがとうございます。

「太平記」の輪読にて

大君の御心のまま決起せし楠公の心のしのばるるかな

第三班

男子学生

心の学問を学びたい

(防衛大学校 理工 三年 森 浩典)

私は日頃多くの知識を学んでいます。今回合宿に参加してみても、しかしそれはただ頭に詰め込むだけの知識であり、本当の人と人との関わりの中で学ぶ心の学問ではないことに気がされました。この合宿で学んだことを無駄にしないためにも、心の学問を続けていきたいと思っています。日本が歴史の中で作り上げてきた和歌を学び、自分のものとしていきたい

です。またこういう学問を自分だけで止めることなく、周りの方々と語り合うことの大切さを胸に、今後学ぼうと思えます。

合宿で消灯後まで語り合ふ友との出会いがたきかな

本当の「日本人」に出会えた

(獨協大学 経済 四年 吉田和正)

この合宿ほど「日本人」を心から感じた事はありませんでした。

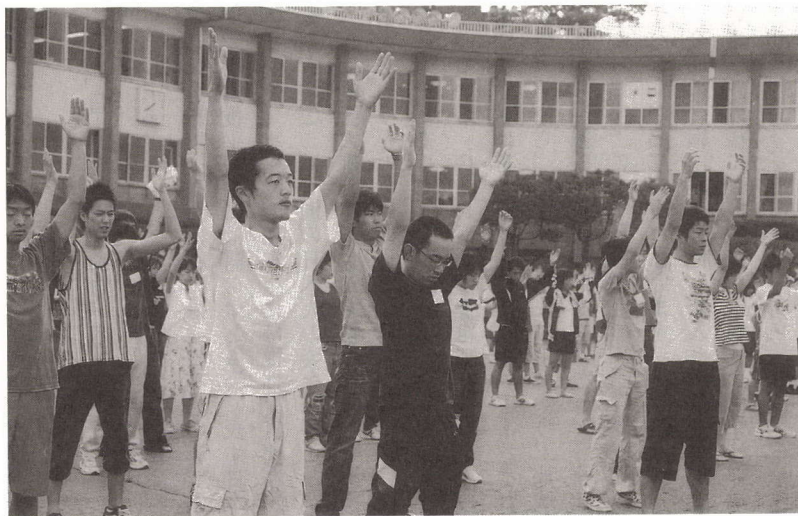
僕は今まで社会に対する憤りをもって勉強をしていました。しかしそのことは実は単に、自分に醜悪していたに過ぎなかったということに心から気づきました。きっかけは長内先生でした。先生御自身が日本人であるということです。言葉の重み、無言の問いかけが、これほど自分に伝わってきたのは初めてでした。感謝するとともに、これから自分に何ができるかを熟考していきたいと思います。

今日をもって解散迎へし三班の一人一人と名残惜しきも

合宿を終へて

(九州工業大学 情報工学 修士一年 結川高志)

この合宿で一番心に残ったのは、小柳左門先生の御講義中の歴代天皇の御歌です。今まで自分は、昭和天皇や明治天皇



朝の集ひ。集ひの広場で国旗を掲揚し、今日も一日元気にと体操をして一日の研修が始まる。英語版のラジオ体操がかかった時もあった。

は国民のことを第一に考えてをられるすばらしい方だと思つてゐたのですが、他の天皇様については知りませんでした。しかし歴代天皇の御歌の中には民を思はれた歌が数多くあり、わづかながら自分にもその御心が伝つてきました。このやうな精神は、皇室の伝統なのだと思ひました。その皇室が二千年も続いてきたことはわが国の誇りであり、素晴らしい伝統だと思ひます。先の戦争で戦はれた方々は、このやうな素晴らしい天皇のためにこそ戦ひ、亡くなられたのだらうと思ひます。私は一人の日本人として、自分自身が国を愛してゐるかを常に問ひ続けていきたいと思ひます。

思ひ出を深く心に刻むなり苦難乗りきる力とするため

自分を反省させられた

(九州大学 工 一年 馬場章史)

今回は自分のことを非常に反省させられる合宿でした。

「日本がおかしい」「教育がおかしい!」「まわりの人々の心を変えたい」今までこんなことを考えていました。しかしそれらのことは、決して軽々しく口にはできることではなく、本当に日本を変えたいと思うならば常に学びつづけ自分の心を正していく、そういうことを長年続けられた方の言葉には重みがあり心がある、そんな方の姿を見たり話をするだけで学ばされるものがある、とこの合宿を通して感じさせられました。

古事記を学びて

やまとことばを幾度も読みて味はへば心の底のこちよきかな

「日本人の姿」を見た

(岐阜経済大学 経営 二年 佐藤駿介)

この合宿で一番得たものは「日本人の姿」を見たことです。長内俊平先生には語らずとも姿で表す日本人を見せて頂きました。小田村四郎先生には稚拙な質問ながら真摯に答えて頂き、ここにも別の日本人の姿を見ることができました。

さらに社会人班の川下さんを初め穴井君、小柳君の姿にも日本人というものを見ました。私は岐阜に帰ってやるべきことが見つかりました。まずは輪読の会を発足させる事、次に今やっている コミュニケーション C F Mでの番組制作に日本人の魂を吹き込む事です。私は日本を変えていきたいです。それは孔子の言葉を借りるなら、国を変えるには地域から、地域を変えるには家族から、家族を変えるには自分から、自分を変えるには足下からです。ここで石村先生の「己の地、己の身より見を起すべし」が出てくると思います。

今回の合宿、本当に様々な人と出会う事ができ、嬉しく思います。最後に皆様の益々の繁栄を祈り。弥栄。

消灯後姿見えずもひそひそとささやきながら友と語らふ

体の内から湧き出る感動

（早稲田大学 法 四年 高木雅史）

今回私は四回目の合宿でしたが、いままでで一番充実した合宿だったと思います。諸先生方の御講義ももちろん素晴らしいものですが、何より私の心を打ったのは班別研修でした。班員の一人が、涙ながらに亡きおじいさまの思い出を語ってくれました。体の内から湧き出る感動をおさえきれないかのような語りぶりには、私もまた他の班員達も本当に心を動かされました。翻って自分にあれだけ人の心を動かすことのできる感動の体験がどれだけあるだろうと考えると、本当にうらやましいと感じました。

涙流し祖父の思ひ出語りたる友の姿の美しきかな

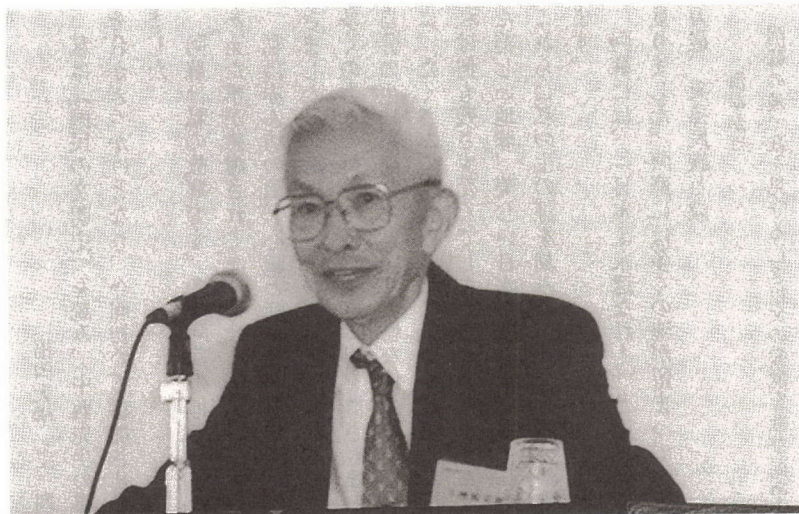
我こそ手を挙げたりし班員の姿に合宿の充実感ず

日本人のタテとヨコのつながり

（佐賀大学 教育 三年 末永 直）

この合宿で私はあまりにも多くのものを得た。祖父のことを涙を流しながら熱く語る穴井さん。班長の任を精一杯に全うしようとして心を尽くされた結川さん。三班の班員の靴をきれいに並べ、日本人を語るなら、まずは日本人として身に着けるべき礼儀作法から学びなさい、謙虚な心を持ちなさいと仰った長内先生などである。これらはヨコのつながりである。

カメラ・レポート7



古典輪読導入講義。(株)国民文化研究会副会長 小柳陽太郎先生は「捨身といふ日本人の尊く美しい生き方が日本の永い歴史の中で民族の血として流れてゐる。日本人の生き方の本質がここにある」と弟橘比売の物語を語られた。

ではタテのつながりはというと、やはり強烈に心に残ったのが、昭和天皇の終戦後の御製であった。「身はいかならんと」と戦争を止めて民に安らぎを与えようとされ、真に民の幸せを願う大御心に大変感激すると共に、頭が垂れる思いになった。民をたからと呼び、君民一体、民の幸せが君の幸せ、君の幸せが民の幸せという国柄が、建国以来ずっと今に至るまで続いてきているという日本に生を受けることができて心からありがたいと思った。楠木正成の歴史もそうだが、特に天皇の御製を偲ぶなかからタテのつながり、すなわち先祖との、天皇との、そして日本とのつながりを感じるに至った。

私はこれらのタテのつながりとヨコのつながりを自分の大切な経験として大いにあたためていこうと思う。子供らは今、経験としてのタテのつながり、ヨコのつながりを求めている。だからこそ私は子供達に、自分が得た「つながり」を心の軸として、「つながり」を感じさせるような教育をしたい。私が高の日本人になることが、子供にとって良い結果を生むと同時に子供が日本人として大成することにつながると信ずる。

絆

同じ師に教へ受けたる班員は忘れえぬ朋友ともとなりけるかな
皇すめみまの大御心を子供らに伝へむことを我忘れぬや

感謝します

(福岡大学 工 四年 穴井俊輔)

私は『国民の文明史』を読み、中西先生の事を知りました。それがきっかけとなり、今回初めて参加させて頂く事となりました。

阿蘇は私の故郷です。その阿蘇の地で、多くの方々と学びあえた事が感謝されてなりません。

私は赤ん坊の頃、心臓と肺に穴があり死にかけて生まれてきました。医者には三日の命と告げられたそうです。しかし多くの方々祈りの下、生きる事を許されました。そして今、自分の生に感謝するという大切な使命を天から頂いていた事に、たくさんの出会いが私に気づかせてくれました。そんな私は何も残さず死んでしまいたくありません。私に命をくれた美しい地球、美しい日本、私を育ててくれた阿蘇の山、河、これらに私の生の証を刻みたいという想いが沸々と沸いてきます。

阿蘇には、「日本よ永遠なれ！」と天を仰ぎ、祈りながら登りました。阿蘇には多くの魂が留まっています。日本民族万歳、天孫民族万歳。

海ゆかば

阿蘇の地で我を見守る亡き祖父の愛歌を歌ひ涙あふるる

この経験をどう生かすか

(敬愛大学 経済 四年 谷村修也)

この合宿に来て本当によかった。あまり他の班の人と話すことは自分にはできなかったけれど、最後の全体感想自由発表では、一人一人が胸にひめた思いを熱く語るのを聞くことができ、充実した合宿の日々を送れたなど改めて思った。

講義では国に対する想い、心の持ち方を勉強することができたと思う。大事なものはこれからこの経験をどう生かすかだと思う。班の皆さん、自分を誘ってくれたまわりの友達、そしてすばらしい先生方に感謝します。ありがとうございます。ごめな
た。

国想ふ人の心に感心しこの想ひ胸に帰路につくかも

良き合宿であった

(関アルバック 北浜 道)

良き合宿であった。始め観念的話振りをしてゐた吉田君は、班に來られた長内先生のお話のあたりから話す内容も変わつていつた。そして全体感想発表の場では、心に感じた事を話す事が大切である事に気付いた旨を、沁み沁みと話してくれた。おじいさんの話を、班の中で涙を流して話してくれた穴井君は、班生活の中でも率先して皆を引っ張つてゆくリーダー的存在であつたが、最後の全体感想発表で、力強く語つ



二日目午後。京都大学教授 中西輝政先生は「日本人は無魂無才になったといふ人もあるが、日本史には深い地下水脈がある」と祖国日本に対する信を語られた。

てくれ、私は胸があつくなり、涙が流れて仕方がなかつた。班長の結川君は、班長経験が乏しい旨自らも語り、始めのうちは自信なげで声も小さかつたが、独特のキャラクターと素直さで、少しずつ皆を魅きつけてゆき、班員の気持ちが一つになつてゆく原動力になつていつた。今回班員に恵まれ、心楽しく四泊五日を過ごすことができました。

班の皆さん、ありがとうございました。

全体感想自由発表にて結川君の発表を聞きて

これまでは生き来てあまり良き事はなかりしと君は話し始めきしかあれど夜のつどひでピラミッドを建てしはうれしと君述べたりき

かくばかり友に支へられ心合はせ一つ事せしはなかりきといふ班友のあたたかき情に支へられし幸述べましぬ涙流しつつ

第四班—男子学生—

ずっと自分の中に入ってきた石村先生の講義

(防衛大学 理工 三年 船山尚志)

この五日間は実に有意義なものであった。一日目にして、これほど腹を割つてという言葉があてはまるような、心をさげ出した話し合いは初めてであった。数ある講義の中でも一番の講義は石村僭悟先生のものであった。自分には知識は経

験には及ばないという考えがあるが、先生のお話は実体験に基づくもので、ずっと自分の中に入ってくるような感じだった。幸運にも石村先生は班付でいらつしやり講義の後も部屋で話すことができた。その日は長内俊平先生もいらつしやつて貴重な時間となつたことは忘れ難いものである。

また最後の感想自由発表において様々な熱い思いを聞き、日本もまだ大丈夫なのだと安心するような感動を覚えた。

大学では決して味わえないであろう今回の経験は永く心に残ることだろうと思う。

別れのをりに

短くも心を分かち語りあひし友との別れはいと名残惜し

感動の体験なくして人に感動伝ふること能はず

(亜細亜大学 国際関係 三年 本間隆宏)

己れの強い感動の体験なくして人に感動伝ふること能はず。長内先生は講義中このやうなことを仰つてゐたと思ひますが、先生の和歌の朗詠は真に胸に迫るものがあり、頭で理解するのではなく心に直に響き、思はず涙の流れることによつて先生の仰られた言葉はかう言ふ意味であつたかと得心致しました。他の先生方の御講義も己れの実体験に基づいてをられ、空論に陥りやすい内容を我々の為に心を尽くして語られ、先生の感動がそのまま私の心を揺さぶりました。

日頃大学で受ける講義とは何といふ違ひであつたか今さら

ながら想ひ、名残惜しい次第であります。今回の合宿で得たものを日常生活に持ち帰り、実生活の中で練磨してゆきたいと想ひます。

国中に散らばりて居る強き友らを想へば自づと力湧き出づ

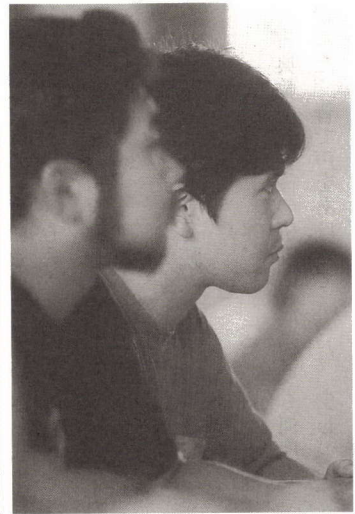
言葉の重み

(獨協大学 法 二年 鈴木正樹)

僕は今回初めてこの合宿教室に参加しました。最初はどことなくぎこちない空気がありました。諸先生方の講義を拝聴し、その熱意に当てられ、その後の班別研修では初対面ということさえ忘れて胸中を曝け出しました。こういうことを通してお互いを研鑽し合える同志になりました。まずはそのことを感謝したいと思います。

この合宿では「言葉の重み」というものを学んだと思います。短歌相互批評ではちよつとした言葉の使い方にも班員みんなが何十分も悩み、意見を出し合いました。まだまだ他の皆さんの様に正しく言葉を使いこなすことはできませんが、僕が学んだ「言葉の重み」を家に帰っても暖めていこうと思います。本当にありがとうございます。

山深き阿蘇に来たりて学びける恩師の教へ日々の糧とす



カメラ・レポート9

講義の一コマ。先生のご講義を熱心に聞く学生達。

体と精神に残っていく学問こそが文化だ

(九州工業大学 情報工学 四年 大津健志)

「学問とは人生どう生きるかを学ぶことだ」長内先生が御講話で話された言葉です。心にとめて強く残り、将来教員になつた時に伝えたいと思う言葉です。

合宿で学んだことは體解、信解です。それは深夜遅くまで短歌相互批評を通じて相手の心に迫ることや、先生の御講義を聞いて先人の思いに心があることが体に蓄積されていく学びだと思うのです。体と精神に残っていく学問こそが文化だと思います。多くの先人の思い、言葉をどれだけ心に刻むかが、どれだけ日本の文化を受け継いでいくかだと感じました。今回の合宿で心に刻みたいと思つた御歌は、

あらし吹く世にも動くな人ごころいはほにねざす松のごとくに

です。合宿の一つの結晶として大切にしていきたいと思えます。合宿で知り合った友と今後も交流を続けて、一緒に学んでいきたいと思えます。同じ時間を共有した未来の日本を作っていく友として。

人の心に届く言葉とは

(早稲田大学 法 三年 米村頼人)

私が今回の合宿で最も心に残つたのは「己れの地、己れの

身より見を起すべし」という言葉です。私はこれまで自分なりに多くの本を読んで多くの知識を身に付けたつもりでいました。しかしそれらは必ずしも自分の体験とリンクして得られたものではなく、したがって多分に実生活から離れた空理空論に陥つてしまつていました。合宿の中で色々な仲間と議論をする中でそのことに強く気付かされたのです。知識を得たことそれ自体は無駄ではなかつたと思いますが、それがいつしか他人の心には届かない自己満足のための言葉になつていたように思います。言葉が他人の心に届き、他人を動かし得るだけの力を持つにはやはりそれが「まごころ」から発せられたものでなければならぬと思います。そのことをこの合宿を通して学ぶことができました。

この合宿で学んだことをこれからの学問に生かし、真に日本の役に立てる人間になることができるよう日々の精進に励んで行きたいと思えます。

逢ひてより幾日も経たぬ友なれど別れし時は積年の朋友

声に出して本を読む

(ハローワーク福岡南 古川広治)

古典輪読講義後の班別研修で何度も何度も古事記の全文を読んだ。皆で声をあはせて読んだ。少しづつ、読みながら、心を込めて読むやうになつた。長内先生は「その人の声が好きこえてくるまで読むんだよ」とおっしゃっていた。短歌をよ

む時も二回は声を出してよむ。文章も声に出して読むとより作者の思ひに近づいて行けるやうに思った。声に出して本を読むことを大切にしたい。

私たち日本人の心のふるさととして、古事記の倭建命のご生涯をお示しただき本当に有難く思ひます。

折にふれて読まんと思ふ声に出して倭建命の生きざま

父の講義を聞いて

(明治大学 理工 三年 小柳雄平)

今回の合宿で一番楽しみであったのは父の講義でありました。講義では菟道稚郎子の話や御製を通して父の思いを、父の声で聞くことができましたのは私にとってこのうえない感動を得ることができました。班別研修で父が紹介した御製を班員と詠むことができたことは非常に嬉しく、また談話の中で学生から父の講義に感動して涙を流したと聞いたり、全体感想自由発表で父の講義のことに触れるのを聞くと何とも言えないうれしさを感じました。

今年の合宿では一貫して自分の心に留めて一生を懸けて考える心の寄りどころにする言葉のすばらしさを教えていただいた。私にとつてのそのような言葉をよりすばらしい言葉にできるように、多くの良い経験をしていきたいと思ひます。

青木兄が就職のために合宿途中で帰りし時に

最後まで残りたしと告げて帰り給ふ友の姿に寂しさおぼゆ



中西先生のご講義後、真剣に質問をぶつける学生。

東京に帰りし後もまた君と多くのことを語り合ひたし

事後合宿

朋友と肩をば組みて歌ひたる祖父の姿を見るはうれしき

阿蘇の朝

雲海に外輪山の並び立ちをはるかに見ゆる九重山かな

外輪山の並び立ちたる山際ゆにはかにまぶしき日ののぼりたる

昇りゆく日に照らさるる高岳のあかねに染まるはいと美しき

先人に心から感謝の念を抱いた

(横浜国立大 工 二年 工藤雅章)

私は日本人の誇りを心の底から実感したいとの思いから、友人の勧めもあり合宿に参加しました。普段の学生生活では体験できない、本当に感動をともなった学びをすることができました。先生方の御言葉はどれも私の心に響き、日本がどれほど素晴らしい国であり、世界に誇れる国であるかという事を心から知りました。特に長内先生の御講義に、感動したのですが、先生は戦後日本が君民一体となつて、全力を尽くして日本国の復興に頑張つてきた事は、本当に日本が世界に類を見ない尊い国家であることの証明なんだとおっしゃっていました。それを聞いた私は、全身に鳥肌が立つほど熱い思いが沸き起こると同時に、先人の方々に心から感謝の念を抱きました。これから、私はこの合宿で得た経験を大切に、学生として、国のために何をすべきかを考えながら頑張つて

いこうと思います。

長内先生の御講義を聞きて

先生の熱き御言葉日本の高き誇りを呼び覚ましけり

「君民一和の伝統」と友とのつながり

(西南学院大学 文 二年 多久彦彦)

今回の合宿で、私は二つの事を得たと思ふ。一つは「君民一和の伝統」とは何なのか、そしてもう一つは友とのつながりである。

私は普段から、日本民族には相手の為になにかをしたい、「わが身を捨てても人のため」と思へる精神性の尊さがある事を感じてをり、それがどこからくるのかといふ事を考へてゐた。そんな中今回小柳左門先生のお話をお聞きし、歴代天皇の御製を拝読する中で、歴代天皇の御製が今上陛下に至るまで「国やすかれ民やすかれ」といふ願ひに貫かれてゐることを感じ、そのやうな天皇を頂く日本だからこそ、日本人の素晴らしい精神性が保たれてきたのだといふ事に思ひ至つたのである。楠正成も後醍醐天皇の庶民を思ふ御心にひかれ、明治維新の尊王の志士達も孝明天皇の御心に感じて動いたのであつた。国が乱れた時、先人は大君の御心に立ち返り、日本を正してゆかれた。今我が国は乱れてきてゐる(特に教育)と思ふ。先人が立ち返つてきた日本の伝統とは、国の事、民の事を誰よりも憶念してこられた大君の御心を偲び、そこか

ら日本を正しき道へ導くといふことだらう。この国をよりよくするため、己が身から行動を起して行きたいと思つた。

二つ目は、本気で語れる友の存在である。今回の班では、二日目の夜からすでに熱き議論が交されてゐた。思ふ事を口に出し合ひ、この国の事を考へる。このやうな議論をできる空間が、今の世ではいかに少ないことか。さう思つた時いかにありがたい事なのか、身にしみて感じられた。このやうな友と本当につながり、共に日本を変へていきたいと強く思つた。

「君民一和の伝統」の御講義を聞きて決意せしこと

大君は国民やすかれの願ひ貫き和歌にたくして受け継がれる

大君の願ひに連なり我もまた日本正す道を歩まん

和歌によるつながりの世界伝へゆきそこから日本変へてゆかなむ

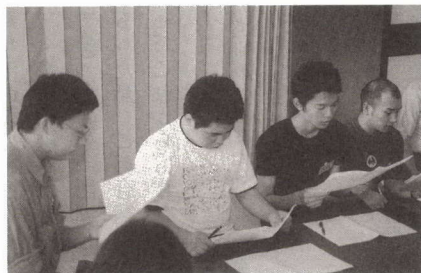
夜中に友と語り合ひて後

講義聞き心に湧きし各々の思ひの丈をぶつけあひたり

友とちと心くだきて語らへばいつしか夜はふけてゆきけり

夜中まで心の底から語り合ふ友を得し事ただにうれしき

カメラ・レポート 11



ご講義後、班別研修にて感想を述べ合ふ。

第五班——男子学生——

人生観が変わるとても印象深いものに

(千葉県立四街道北高校 普通科 二年 菅谷 潤)

今回この合宿には初めて参加させて頂きました。一回目に創作した和歌にも書きましたが、本当に久しぶりに規則正しい生活で、逆に疲れてしまいました。講義も初めて聴く話であり、九十分という長丁場ということもあって、話の要点がつかめず、班別討論のときには迷惑をかけてしまいました。ですが、そんな私でも先生方の話には感動する部分がいくつかあり、少しは成長したと自負できるくらいになりました。私はもともと勉強机には背を向けてきた方なので、本当に疲れたというのが率直な感想ですが、その疲れも気持ちの良い疲れだったのでそんなに苦にはなりません。この合宿は人生観が変わるとても印象深いものになりました。今後はゆっくりとこの合宿を振りかえろうと思います。ありがとうございます。

一時を共に過ごせし我が友と今しばらくの別れを惜しむ

熱く語り合える友・魂のこもった話

(早稲田大学 政経 一年 時枝秀行)

大学での友人とは遊びや趣味の話はよくするが、学問の話とくに日本人の心、日本が受けついできた文化の話をする機会など、全くといっていいほど無かった。この合宿教室で、心から語り合える友を見つけることができ、本当に有難い。自らの体験に基づき、日本本来の姿を理屈でなく心に伝わるように語りかけて下さる方や、長い人生の中で悟り得た、心の中の熱いものを、友として学生の僕らに語りかけて下さる方の講話には、話を聞いているだけなのになぜか体が震えた。話して下さる方々の態度は「年下の者に教える」や「教育する」といったものではなく、「自分の魂を伝える」や「心で語りかける」といったものであった。熱く語り合える学友・人生の先輩方による魂のこもった話。この合宿で僕は得難きものを手に入れた。来年そしてこれからもずっとこの合宿に参加し、勉強していきたい。

夜更けても語り続けし班員なかまたち別れてもまたいつしか会はむ

今の日本を悲しんでいる方がいる

(亜細亜大学 国際関係 一年 山室貴弘)

合宿に参加する以前には天皇を(特に現在の)必要のないものだ、税金の無駄使いだとすら思っていました。私はそう

いう教育を受けてきました。しかし、合宿の授業で天皇の和歌を知り、またそのことについての班での話し合いを通じて、私の思いは大きく変化しました。論理的には言えませんが、民をたえず思ってくださいる人が上にいるということは、とても良いことではないか、と思いました。ただ、まだまだ腑に落ちないこともあり、色々と考えていかなければならないと思いました。現在様々な問題が日本で起きているが、その問題の根底には憲法がある。今の日本人は自分さえ良ければ良いと考え、先の日本のことを少しも思っていない。そういうことが本当に怖いことだと思います。今回、この合宿で今の日本のことを悲しんでいる方がいると知っただけでも、まだまだ日本は捨てたものではないと思いました。この合宿で得たものは大きいと思います。

亜細亜大ともに歌ひしわが校歌世代を超えて心通はず

これからの研究に大いに役立てたい

(桃山学院大学 社会 一年 梅山裕大)

私は社会学部に所属している関係で、人間全体の営みであるとか、文化というものに大変関心を持っております。今回合宿に参加して、今まで私が感じてきた憲法の問題を初めとし、社会学に密接に関わってくる内容の御講義を聞くことができました。その中には、私の知らないこともあり、これから私が進める研究に大いに参考にさせていただきたいと思

カメラ・レポート 12



二日目夜。榊石村萬盛堂代表取締役社長 石村備悟先生は、心の伝承と実践といふことが如何に大切であるかを、老舗に伝はる「先義後利」といふ言葉を通して語られた。

ます。また厚かましいようですが、次回の講義に是非とも「宗教」のお話を加えていただきたいと思います。最後になりましたが、合宿に参加させていただき誠に有難うございました。

合宿全体を通じて

いくとせも先祖守りゆくこの土地に心もろ共我が身をひたす

確信が得られた

(長崎大学 医 一年 茅野龍馬)

今回の合宿に参加して得られたものは、「自分の考えてきたことは正しかった、自分がやろうとしていることは正しかった」という確信でした。

嗚呼友よ君達に会へてよかったと心底思ふ今のこのとき

日本人として生まれたことに誇りを覚えた

(慶應義塾大学 法 三年 木村大和)

この合宿で得られたものは長内先生のおっしゃった体解・心解であった。家で寝ながら本を読んで得る知識も確かに大事ではあるが、やはり先生方の実存をかけた熱い生の声を聞いてこそ、本当に心に残るものが得られると感じた。自分は日本人としての誇りを持ちたいとの思いから、この合宿に参加したが、先生方の講義からはもちろんのこと国文研の方々

や参加者の態度からも日本人の素晴らしさを感じとった。

「朝の集ひ」の国旗掲揚の時、みんな大きな声で国歌を歌い、講義の時は元気よく「お願いします」といい、廊下ですれちがった時は「こんにちは」と声をかけられた。このような中から日本人の礼儀正しさ、謙虚さ、国を想う気持ちが変わって感じられ、自分も日本人として生まれたことにとても誇りを覚えた。阿蘇の地には自然の雄大さとともに自然の恐さも思い知らされた。突然の夕立に、驚くほど大きな雷の音。怖かったがこれもまたいい思い出になるであろう。

はやばやと帰りたいとぞ思ひし日今に思へばなつかしきかな

学ぶ姿勢を教えて頂いた

(獨協大学 外国語 四年 藤崎洋平)

諸先生方の御講義はどれも心に残るものではありましたが私が最も感銘を受けたのは石村先生と長内先生の御講義であります。お二方とも生きて来られた実体験を下に、石村先生のお言葉を借りれば「活きた言葉」で、日本に生きる我々にとって重要な事を伝えて下さったように思います。また長内先生には学ぶ姿勢を教示していただきました。私は知のみを求めていたのではないか。先生方の話される一言一言に秘められた熱い思いを汲みとる事をしていなかった事に気付かされました。長内先生のお話を最初に聞いていければ、壇上で感極まっておられた左門先生ではなく、左門先生の得た感動

を共に出来たはずである事に気付き深く自らを恥じました。しかし、最後に学ぶ姿勢を教えてくださいました事により、自らに甘えることなく、勉強に励む力を与えていただきました。何よりもまして尊きはらからとみ教へとはに胸に留めん

倭建命の歌・日本のふる里

(九州大学 農 五年 森永賢司)

私は福岡で拉致問題解決運動に参加させていただいているが、この問題が明らかになったにもかかわらず、何故日本は下手にならないのかと思っていた。それは何故自分が拉致問題解決運動に取り組み続けてきたのかということと関連して考えていた。同じ日本人が苦しんでいるのだから、そう頭では考えていたが、ずっと心落ち着かず、では、日本はどういう国なのかということをおれなかつた。今合宿で最も感動したのは小柳陽太郎先生の古典輪読導入であった。「大和は国のまほろばたたなく青垣山こもれる大和しうるはし」この倭建命の歌をさして「日本はふる里を取り戻さなければならぬ。ではふる里とは何か。その時私たちはこの倭建命の歌を思い出すのです」と先生は仰られた。この生き生きとした倭建命の古事記の文章を読み返し読み返しこれから自分の人生を定めてゆきたいと思った。最後に、共に今合宿を過ぎてきた我が五班の友にも感謝の思いでいっぱいである。素直に語り合えた体験はかけがえのないも



三日目朝。前拓殖大学総長 小田村四郎先生は「今の憲法をいくらいじっても良くはならない。一度は均衡のとれた明治の帝国憲法に帰る必要がある」と語られた。

のである。

神代近き倭建の世を偲び日の本の心をたづね生きなむ

小柳左門先生の姿に圧倒された

(早稲田大学 法 四年 穴井宏明)

私は開会式で挨拶をさせてもらいましたが、「聴く」ということをずっと考えております。そんな中、私は今回の合宿で小柳左門先生の講義の姿が印象的でした。御製という氷を溶かされる小柳先生の胸中の温気というものをまざまざと見ることができました。天皇陛下の国民へのたくさんの思いを「聴かれています」小柳先生の講義中のお顔が忘れられません。特に昭和天皇の御製をお詠みになられたときに、声をつまらせられた姿が忘れられません。優しさに満ちた小柳先生の姿がとて大きく感じられ圧倒されました。この国民文化研究会には、心から尊敬できる人が本当にたくさんいます。私は来年から就職するのですが、石村先生のように「己の地・己の身」から言葉話せる人間になれるように、私の地・私の身にてできることをまごころをもって一生懸命取り組んでいきたいと思っています。

言の葉をお聴きになれる先輩の御姿我も真似たしと思ふ
体験ゆ発せられたるいのちある言の葉我も語りいきたし

第十一班—女子学生—

先人たちに胸を張れる様な生活を

(麗澤大学 外国語 四年 川尻聡美)

日本人の心、大和魂というものを、この合宿を通じて学ぶことができました。この合宿に来る前は、ただこの国に生きているだけで、日本人として生きるなどとは一切思っていないでした。合宿が終わった今でも、日本を変えていこうとまでは思えないのが本当の気持ちですが、ひとつだけ想う事は、日本の先人たちのおかげで今の私たちがあるのだから、先人たちに胸を張れる様な、そして自分自身にも胸を張れる様な、そんな生活をしていきたいという事です。

一日目笑顔少なしやる気なし不安に思ふこれからの日々
最終日あつという間の日々思ひ友との会話思ひ出したり
合宿終へ長いと思はれし五日間も返りて見れば短きことよ

日本人の気質を伝える一日本人として

(東北女子大学 家政 二年 西塚みつる)

私がこの合宿に参加したきっかけは、学校からの推薦です。参加する前は気持ち乗らず、足取り重たく青年の家に到着しました。

研修を何度か行い、自分の思った事を率直に述べ、また班員も自らの感想を述べるといふ営みを初めて経験しました。その中で、自分の視野や考えが二重、三重に広がっている事を実感しました。そして、このような短期間の中でこれほど人間の絆が深まっていくものかと驚きを隠せませんでした。講義全体を通じて、日本の本質を学び、まるでガラスを溶かした、あの真つ赤な状態のようなとても熱いものが心の中に注がれた気がします。

これから、自分が将来たくさんの人々に僅かながらでも日本人の気質を伝えることを一日本人として行わなければならぬと痛感しました。

今上天皇の豊かな国土を祈られて山梨県を詠まれた御製の中に「満つる」といふ意に気付くとき我が名にぞ願ひ込めたる親に感謝す

今まで生きてきた中で経験した事のない五日間

(龍谷大学 法 三年 四方みのり)

正直、和歌や古典といったものには余り関心がなく、自ら学ぼうとした事はありませんでした。しかし、今回合宿に参加し、こういったものに触れる機会が得られ、じつくりと先人の和歌や歴史に触れ、どういった風にこの国が創り出されて来たかということを学ぶ事が出来たように思います。班員



短歌創作導入講義にて、福岡市立和白東小学校教諭 是松秀文先生は「感動をよく見つけ素直な言葉で一首一文で詠んで下さい」と述べられた。

である同世代の人々がどのように考えているかということ話を話し合える機会は滅多にないので貴重だったし、また日頃感じている事を話し合えた事により、一層仲良くなれたと思います。今まで生きてきた中で体験した事のない事を、この五日間でたくさん体験する事が出来ました。これから先、より深く学ぶきっかけにしたいと考えています。

合宿で共に語らふ仲間得て心あたたまりて帰路につかんとす

先人の姿や和歌から日本人としての心のあり方を学んだ

(東北女子大学 家政 二年 小笠原有那)

私は今回初めてこの合宿に参加致しましたが、初めは不安な気持ちばかり持っていました。何故なら、この合宿に参加したのは、学校から推薦していただいたという形で、突然、参加して来るようにと言われたのがきっかけだった為、何もわからないまま、とまどいを覚えながらも参加する事を決心したからです。

しかしながら、先生方の御講義を聴かせて頂くうちに、日本人としての心の在り方や精神を、先人の御姿、御製等から、これほどまでに読み取ることが出来るのかと、そして今まで何故それを知らなかったのだろうと、自分の視野の狭さ、未熟さを恥じる思いでした。しかし、それと同時に、日本を支えてきて下さった先人の方々に対し、ありがたいという思いも持ちました。何とも言えない感情が心に込み上げてくるよ

うな、そんな気持ちになりました。それから、班の皆と共に様々な意見を真剣に述べ合ったり、和歌の出来上がった瞬間に感動したり、他愛もない話をして笑い合ったり出来た事がとても嬉しかったです。本当に忘れ難い思い出となって心の中に深く残りました。

阿蘇の地で友と語らひ笑ひ合ふこのひとときを忘れじと思ふ

『ますらをのかなしきいのちつみかさね…』を心に刻んで

(福岡女子大学 文 四年 黒岩礼子)

合宿に参加するにあたり一つの目標を掲げていました。それは自分を支える言葉を探すという事でした。今回私は次の言葉が残りました。

・ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさね守る大和島根を

三井甲之先生の歌です。私はこの和歌を心の中に大事に持ち帰り、自分の中心軸とすることにしました。多くの先人方の願いと命が込められているこの国に、多くの先人方が命をかけて守って来られたこの日本に、今、自分がいること！このことをもっと強く実感して生きてゆかねばなりません。

また合宿を通じ「言葉」というものの大切さを改めて強く感じました。私は国語の教師を目指しています。もっともつと必死になって勉強しなければ、「国語の教師」にはなれない!! と大変痛感しました。

合宿参加を決めし折

合宿に参加することためらふも父の言葉に決意固まる
教職を目指すものなら合宿に参加すべしと父は言ひたり

これからすこしずつ知識を身に付けていきたい

(浪人生 古井 萌)

この五日間の間にたくさんのことを教えてもらったと思う。今回、初参加であるため、どのようなことをする合宿なのか、あまり予備知識を持たずに来た。父が昔、この合宿に参加していて、話をしてくれたので内容面において、小中高と教えられてきた歴史との違いにショックを受ける事はなかった。だが、三日目、四日目になると正直、あまり天皇の話ばかりで疲れてしまった。しかし、最後の感想発表で、生半可な知識によって頭だけで考えていたことに反省というものがあった。これからは自分のペースで知識を少しずつ身に付けていきたい。

また班別研修のとき、班員の発言の中で「ありがたい」という事にハッとさせられた。母が「感謝の気持ちを忘れるな」といつも言っていたのを思い出しました。

「ありがたい」さう言ふ君こそありがたい母の言葉の今身にしみたり

カメラ・レポート15



レクリエーション。中岳火口・草千里浜を散策する。

精神の豊かさを育む短歌の力

(福岡大学聴講生 小野実里)

合宿で一番心に残りましたのは、小柳左門先生の「君民一和の伝統」の御講義でした。後土御門天皇の「みどりごの乳房のみかはまつりごと甘きに民もはぐくまるらむ」とのお歌をご紹介された後に、先生が「この時代は土堀もやぶれた中で」と解説を付け加えられました。その解説をお聞きし「本当の豊かさ」とは物質が満ち足りることでなく、物があることでもない。言葉にすること、己が心を言葉にする事で、初めて本当の豊かさ、精神の豊かさは得られるのだと気付かせて戴きました。そのことを天皇様御自らが踏み行っていらっしやる。この度、歴代の天皇様の御製を拝しましたが、どの御歌も民を思われる御心と、当時の時代の苦しみが伝わってきました。しかし、歴代の天皇様は時代の苦しきことから逃れることなく、ただ切々と御製にお詠みになられている。時代の中で己が定められたお立場の中で、ただ国民の事を祈り、生きておられる。決してよき時代とは言えない状況の中で、その真実の世界を御製にあらわしていらっしやる事を思う時、真の豊かさとは、恐れ多くも、陛下の御製の中にこそあると思われてなりません。また、言葉を豊かにする事こそが真の豊かさにつながって行くのではないかと強く思いました。その言葉への表現の極みが短歌という日本文化なのだと思います。

浅緑広がる高原に紫の小さき花の目にとまりたり

第十二班—女子学生—

感動をみなで共有することができた

(お茶の水女子大学 生活科学 三年 中島明子)

今回は二回目の参加ながら班長を任されることとなり前回と違った緊張感がありました。私以外皆初参加ということとなり、皆が心の底から自分の想いを伝えようと苦しむ姿が逆に私には嬉しくて胸が熱くなる思いがしました。

先生方の御講義はとてすばらしく胸を打つものばかりでした。特にもしっかり印象に残っているのは小柳左門先生の御講義でした。歴代天皇の御製から、いかに天皇が、日本国民一人一人に対して、まるで我が子のように愛情をお持ちでいらっしやったかということを感じることができ大変感動しました。班別研修では、みんなで声を合わせて御製を詠むことで、感動をみなで共有することができ、皆で涙を流しながら、より絆を深めることができたことを大変嬉しく思っています。

小柳左門先生の御講義を聴きて

先生の熱のこもれるお話に心奪はれ涙あふるる

み友らと涙流して語らへば絆のさらに深まりけるかな

言葉の持つ力強さを実感できた

(福岡大学 修士 二年 河野牧子)

今回、初めて合宿教室に参加して日本に対する様々な想いを先生方や参加者から聞くという貴重な経験をする事ができた。この合宿で心の底から出される言葉の持つ力強さを実感できたことは、大きな感動だった。

全てのお話、考えに自分は賛同できたわけではなかったが、意見を交わしたり、話を聞いたりする中で自分の考えをさらに深めていくことができたと思う。特に班員をはじめ参加者の、経験と共に語られる涙ながらの話は、いかに自分が人の痛みを感じられていなかったかと恥じ入ると共に、これから自分はどう友情を築いていくべきか深く考えさせられた。別れがたき友らと過ごす最後の日連絡しようと約束交はず

日本人としての信念と誇りを持って生きてゆく

(早稲田大学 社会科学部 三年 川井 茜)

父の勧めと友達からの誘いによってこの合宿に参加しました。半ば「義務」のような心持ちで、合宿当初は正直気持ちが悪かったです。でも温かい班員に恵まれ、尊敬する先生方に出会えお話できたことは何事にも代えがたい私の財産に

カメラ・レポート 16



台湾訪問団報告。訪問団団長の福岡県立稲築志耕館高校教諭 小野吉宣先生(右)と、学生代表として東京大学法学部4年 武田有朋君(左)、九州工業大学情報工学部4年 大津健志君(中)が報告を行ひ、台湾の歴史に触れた想いを語られた。

なつたと感じております。

日本についてたくさんの方々の熱き思いに触れ、自然に涙することもありました。私が普段何気なく踏んできた日本の地を踏みしめる足に根っこが生えたような気持ちです。この祖国の地を愛し守りぬく精神を、生きた言葉と歴史から学びました。

この合宿に携わった方々全員に心から感謝を述べたいと思います。日本人として信念と誇りを持って生きていくこと、決意を新たにする機会を頂いたことを心から感謝いたします。ありがとうございました。

先人の祖国守りし信念を心に刻みこの地を踏まん

謙虚なひたむきな気持ちで生きてゆこう

(西南学院大学 文 三年 森山苑子)

短歌創作で私の短歌を先生に見ていただいたところ、自分の思いというよりはスローガンの的で外面だけのように思えるという指摘を受けました。私はこの時に、自分は本当に日本のことを考えていたのだろうか、祖父の孫だからという思いの方が強くて少々傲慢になつていなかっただろうかと思いましたが。先生方の講義を受けても、本で学んだような意見を自分の意見のように言ったり、祖父の孫だからという気負いも相交わって、本当の自分が見えていなかっただと思ひます。それに気づき反省した後、長内先生の講義の中での、学問とは

生きるためにすることであり、私たちはいつも心のふるさとである祖国日本に立ち還らなければいけないということを、心の底からそうだと思えることができたので、これからは常に謙虚なひたむきな気持ちで生きてゆこうと思います。合宿で己の未熟さ痛感し真心持ちて学びてゆかん

日本のありがたさや生き方をもつと学んでいきたい

(東北女子大学 家政 二年 堂端桃子)

班別研修などを通して、私は今まで日本について真剣に考えていなかっただ事に気づかされ、とても恥ずかしく思った事を、これから先忘れることはないと思います。我が国日本を他人事のように見ていた事は反省しなければならぬのですが、今は、私の中、友の中、そして先生や先人の中にあるこの熱き想いと日本を愛する心を、周りの少しでも多くの人々に伝える事が、今、私にできる事ではないかと考えます。

御講義で特に胸打たれたのは小柳左門先生の「天皇は民を『だから』と思ってくれている」というお話で、驚きと共に幸福を感じました。私はこの話を胸に日本のありがたさや生き方をもつと学んでいきたいと思ひました。

全体感想自由発表を聞きて

集まりし国想ふ友の熱き心知りて我が身は奮ひたちたり

日本のために何かしたい

(福岡教育大学 教育 二年 山口瑛美)

この合宿教室での大きな出会いの一つは、楠兄弟や倭建命の死に際の姿との出会いです。それも、現代の人が解釈したものではなく、その当時に書き残された古典の原文で、直接にその姿を知ることができました。楠兄弟が死に際に「からからとうち笑ふて」「いとうれしげなる様子にて」おられたことは、それまでに自分のもてるものを全て出しきられたか
らではないでしょうか。倭建命は最期に歌を詠まれて崩が
られました。

班員のみなとこんなに楽しく過ごせるのは、沢山の先人の方々、日本を守ろうとされている方のおかげと知り、また、アインシュタインが「このような尊い国が世界中に一ヶ所く
らいなくてはならない」という言葉を残している事を知って、私もこの日本のために何かしたいと改めて強く思いました。

日の本を守り続ける先人の生きる姿に心打たれし
もろともに笑ひ語れる大切な御友得しことうれしかりけり

すごく充実した五日間でした

(麗澤大学 国際経済 一年 小林紀恵)

私は今回初めてこの合宿に参加させて頂いたのですが、す
ごく充実した五日間でした。御講義の内容も濃く、言葉では



慰霊祭に先立ち、元新潟工科大学教授 大岡弘先生から慰霊祭の意義と祭の次第、心構へについて説明がなされた。

うまく言い表せませんが、とても勉強になりました。御講義の後の班別研修で班員みんなで見解を言い合い、日本について考えさせられました。班員の方々も私より先輩なので友と呼ぶのは失礼かもしれませんが、よき仲間ができ、合宿がより楽しいものとなりました。ただ、自分があまりにも勉強不足だったことがとても恥ずかしく、もっと勉強しておけばよかったと後悔しています。来年またこの合宿に参加できるならば、次はもっとしっかりと勉強してきたいと思います。

我が友と毎日集ひ学びつつ己の未熟さ恥づかしと思ふ

慰霊祭のおごそかさに関心された

(元新潟工科大学教授 大岡 弘)

今回初めて慰霊祭に関係させていただいた。末次先生が傍目に見えない所作を微音で、あるいは心中で秘かに行はれてゐることをお聞きし、神々にお仕へするとはさういふことなのかと得心できたことはありがたいことであつた。

神饌献撤に際し、又手をするのを忘れていたこと等、自身の問題点は多かつたが、慰霊祭のおごそかさには、心打たれるものがあつた。新鮮な印象の残る合宿であつた。

降神の儀に臨みし時

警蹕を唱ふる声の尾を引きて沁み入る如く心に入り来ぬ
二拍手の打たれみ祭り始まりぬ大阿蘇のふもと草地の齋庭で

「君民一和」の伝統を守ってゆきたい

(甥) IHIエアロスペース 内海勝彦

絹田先生の「国史の清流」と題する太平記のご講義から始まり、今回の合宿が日本の歴史を流れる一筋の道を一貫して示すものとなつたのは有り難いことであつた。日本に脈々と流れる「君民一和」の伝統をしつかりと守り、次代に語り継いで行かねばならないと改めて思ふ。

来年節目の「第五十回合宿教室」を成功させるべく、私も微力ながら力を尽くしたい。途絶えさせてはならない営みであるといふことを、最後の全体感想自由発表での学生諸君の感想を聴きながら強く思った。

小柳左門先生のご講義をお聴きして

ひとすじに流るる国史の清流をうつつに感ずこれの御製に

第十三班—女子学生—

思ひやりを持って生きていきたい

(早稲田大学 教育 三年 小林由香利)

初めは、この合宿に来て、皆と仲良くやうて行けるか、とても不安でした。家族や祖父母の支へや励ましのお蔭で参加でき、多くの良い経験ができ、とても嬉しく思つてゐます。

私が最も心に残った和歌は、小柳左門先生のご講義で紹介された「苗」と題された皇后陛下下の御歌です。

日本列島田ごとの早苗そよぐらむ今日わが君も御田にいでます

といふお歌の中に込められた皇后陛下の今上天皇を思はれる温かな人柄が感じられました。又、そのお歌と相聞歌の様に思はれる、今上天皇の「姿」といふ御製も大変心に残りました。

うち続く田は豊かなる緑にて実る稲穂の姿うれしき

この御製から今上天皇の大変お優しいお人柄が伝はつてきました。

私も両陛下のやうな心の通ひ合ふ人間関係を築いて行きたいと思ひます。又、班長を通じて学んだ、相手の立場に立つて思ひやりを持つて接することのできる女性になるやう努力していきたいと思ひます。

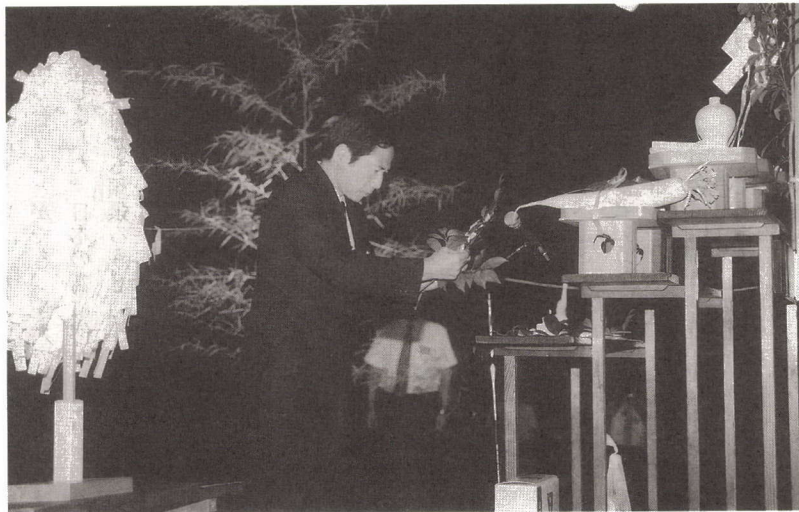
皆共に心通はせ語り合ふこのひときはうれしかりけり

心で感じる事ができた

(北海道大学 法 二年 安田陽子)

参加を勧めてくれた両親と、一緒に勉強に取り組んだ班員に感謝の心で一杯です。

班員と語り合ふことで一人よがりの思ひから多くの意見を知り深め合ふことで多くのことを心で感じる事ができました



慰霊祭。涼風吹く夜の草原で執り行はれた。戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられた方々の御霊を参加者一同心を込めてお慰めした。

た。このやうな場にもっと多くの日本の大学生が参加し、「心」で日本を感じる必要だと実感しました。「本物の日本人に出会ふ」ことで心を奮はせられました。先人の思ひや日本人の生き様にも自然と呼応するものがありました。をこがましいかもしれませんが、私には、日本人女性としてしかるべき使命があるのではないかと確信しました。そのために「心解・體解・知解」を深めようと思ひます。多くの人々が、こんなにも日本を思つてゐることに喜びと何よりの心強さを感じました。

来年の合宿には多くの友を連れてきます。

日本人女性として

日本くおもひ志もつ友どちと支へあひつつ進みゆきたし

日本人を信じていいのだ

(早稲田大学 文 一年 原川 翠)

私は日頃から、日本人の精神面について漠然とした危機感を抱いていましたが、それが何なのか、どのように変化してきたのか知りたईと思つていました。

どのご講義からも、古典を通して、人と人とのつながりなど物質的な価値とは違つた価値を大切にする日本人の精神を主に学びました。そして、危機感はあるけど、日本人を信じたいのだといふことを確信しました。

班員の皆様と出会えたことは何より嬉しく思います。とて

も暖かく、色々なことを深く考えている人たちでした。ふだん友達とは話せないような、いつも気になつていたことを真剣に話し合うことができ、一人で考えていては得られない喜びを感じました。日本の為になにかしたいという思いが伝わつてきて、自分も頑張ろうという気持ちにさせてくれた友人たちに感謝します。

阿蘇の地で出会ひし友はありがたく離れ行けども心結ばむ

無知・無関心さが恥ずかしい

(東京女子医科大学 看護 三年 藤崎敦子)

私がこの合宿に参加して、本当に心から嬉しいと感じたことは、尊敬している先輩が大学の時から学んできた学問の一端を知ることができたということです。

合宿に誘つて下さつたことを心から感謝しています。

今一番心が揺れていることは、感想自由発表を聞いて、みんなにも自分のすべきことを、また、日本のことを考えている若者がいるのかということです。私にはとても衝撃でした。同時に自分の無知・無関心さに恥ずかしくなりました。

最後に、この合宿に携わつて下さつた皆様全員に感謝致します。有難うございました。

全体感想自由発表を聞いて

五日間ともに過ごせし学友の熱き言葉に涙こぼるる

学友と肩を組み合ひ歌はれし先輩のみ姿頼もしく見ゆ

本気でこの国のことを考えたい

(福岡女子大学 文三年 馬場智茶)

合宿を振り返ると本当に内容の濃い五日間だったと思います。日本のことを真剣に考えている先生や友達にめぐり合えて強い刺激を受けました。先人の偉業や日本の文化、古典、和歌に触れるたびに、心の底から奮い立たされるような気がしました。学べば学ぶほど、自分は何というすごい国に生まれたのだと改めて感じました。この国に生まれ、この国で一生を終えるのだから、本気でこの国のことを考えたいと思いました。

ただぼーっと生きていては、私の祖先に申し訳ありません。私と同じ歳の大学生がこんなにも熱い気持ちで国を思い、何かをやらなくてはと志を持っている。その姿に強く心を打たれました。

これ程に国を思ひて語り合ふ友との出会いがたきかな

友の大切さを心で感ずることができた

(東北女子大学 家政二年 成田教子)

私は今回が初めての参加で、この阿蘇に来るまでは、不安



四日目午前。国立病院機構福岡東医療センター副院長 小柳左門先生は「君民一和の伝統」と題して、歴代天皇方の御製を紹介された。国民の上を思はれる捨身の御心に参加者は深い感銘をうけた。

でいっぱいでした。全国から集まった様々な人たちと出会い、初日はなかなか慣れませんでした。しかし、二日目になり、班別研修の場で、それぞれの心中に感じたものを飾らず素直に語り合うにつれ、何か心につながるものがあるように感じられました。

私は日本の歴史にあまり触れることがなく、知識がとても乏しかったのですが、そんな無知の私が、常識的なことを質問してもいやな顔一つせず詳しく、そして分かりやすく教えてくれました。

今回の合宿では、日本の歴史・愛国心を学んだのは勿論、友というものの大切さを心で感じ取ることができました。

ご講義をしてくださった先生方、班付の先生、合宿を支えてくださった方々、そして、心中を語り合えた友に心から感謝いたします。

合宿で心の絆結びたる友との別れ間近に迫る

先人の思いを伝えていきたい

(福岡教育大学 中学社会 一年 平賀初枝)

たった五日間でしたが、これほど人に出会えてよかったと思つたことはありません。又、多くの学生が日本について考えていたことが嬉しく、私自身も身を正されました。多くの先人の生き方を学び、その思いや日本の文化を伝えていくことが私の使命だと感じました。それとともに、何も知らない

自分を申し訳なく思います。先ず、日本の歴史を正確に知ることから始めたいと思います。長内先生が「心解」と言われたように、歴史を頭で理解するのではなく、心を寄せて理解しようと思います。

先人の遺せし言葉がつつ日本のこころ伝へてゆかむ

我国を築きこられし先人に感謝の心持ちて生きたし

第二十一班―社会人―

御製に誠の深さを感じた

(福岡県立門司高等学校 副島賢三)

二日目の古典輪読導入講義「古事記・倭建命」では、小柳陽太郎先生の素晴らしい講義に魅了され、あたかも自分でスラスラ読んでいるような錯覚を覚えた程でした。原典を、姿勢を正し、腹の底から読み、理解できなくても「心でことばをとかす」「ことばの命に触れる」ことができることを実体験させて頂きました。

四日目の講義「君民一和」では、小柳左門先生から歴代の天皇が詠まれた御製には、我々の到底及ばない誠の深さが現われており、我々国民に向けられているのかを知りました。

また、如何に心と言葉をお磨きになられたかを拝察すると同時に、教職に携わる身として、生徒を思う気持として、良き

お手本として読んで行きたいと思いました。

最後に、運営の方々の、ご苦勞を拜察しつつ、今合宿に参加し勉強させて頂いたこと心より感謝申し上げます。

みおやらの清き流れを受けつぎてころのかたちいかで深めむ

體解たいげと心解しんげの大切さ

(元日立製作所 日高廣人)

江田島、御殿場と今回で三回目の参加となる。情性に流されることなく、合宿の間ならではの體験を、と意氣込んでやつて来た。そしてその甲斐があった。

絹田先生の「國史の清流」では、我が國の歴史と傳統に育まれた日本人の心の奥底に脈々と流れる清流があること、それを各人が自らの手で掘り當てる努力をしなければならぬことをひしひしと感じた。日本人の誇るべき地下水脈を。

長内先生の情熱こもる語りかけ。人生いかに生くべきかを知る手段に①知解②體解③心解の三つ有り。明治大帝が東京帝大に行幸になり、その學問の餘りにも知解に傾けるを嘆かれて教育勅語の制定につながったといふお話を思ひ出した。知解はいつでも本を読めば得られる。書物では得られないまごころを知る、體解、心解こそはこの合宿を通じて得られるのである。ありがたうございました。

日の本の國史の清流を説く君に大楠公のまこと學べり

日の本に地下水脈は細々と流るるを自ら手で掘り當てん

カメラ・レポート 20



熊本県立宇土高校教諭 久保田真先生による「創作短歌全体批評」。各班から一、二首を選
び、作者の気持ちを推し量りながらユーモアを交へつつ丁寧に添削してゆかれた。

言の葉にこもれる父祖の生きざまを御製を讀みて深く味はふ
草原の小高き丘の頂をゆにはとさだめ靈を慰む

知解よりも體解・心解を大切にと長内先生の熱意迫り來

集中する時間が持てた

(鶴丸菱 浜田 守)

日常の業務からはなれ、集中して学ぶことのできる数少ない機会であつたと思います。声を出して輪読するということを行わなくなつて久しく、今あらためてその大切さを学ばせていただいたと感じます。また同じ日程をすごさせていただいた方々に感謝いたします。いろいろな職業の方の常には聴くことのできない話をたくさん聴かせていただきました。

短歌を作ることに苦しみ、また相互批評で自分の想いを追求することに「集中」する時間をもてたことも忘れることのないよう、勤務先での業務に追いかける日々を、追いかけていく日々に変えていく手段の一つとして生かしていきたいと思います。

集まりてともに学びし友がきに幸多かれと願ひてやまぬ

歴史を学びたい

(川下継範)

私は歴史に少し興味があり、この合宿に参加したのも歴史

の話が聞きたいという単純なものからでした。私は今まで、歴史の本や教科書を見て、それを覚えることで歴史を学んだと思つていました。しかし講義を聞くうちにそれに疑問を持つようになりました。私は今まで歴史について「考え」たことがないことに気付きました。その人物が何を考えていたのか、人々がどのような思いで決起したのか。人の想いに触れてみて、自分なりに考えることが歴史を知る上で大切な事ではないか、すなわち歴史を学ぶことにつながるのではないかと思うようになりました。

現在私は警察官を目指して勉強しております。この合宿で学んだことを、まずは身近な人からそしてより多くの人に伝えたい。そしてその為に自分がもつと学ばなければと思いません。

正成の講義で学びし日本の心家に歸りて祖父に伝へん

国の歴史の清流に惹かれた

(鶴福岡銀行 遠藤洋平)

今回の合宿で体感させて頂いた事は多くまた貴重なものでありました。古より続く「国史の清流」とそれに直接触れる古典輪読など私の中でまだまだ消化しきれないとても深いものでした。私にできる、すべき事は何か、それはきつと、この国の歴史の清流、この合宿でつながった流れを持ち帰り、絶やさない事であると思ひます。私につくることのできる流

れはきっと大きなものではありません。ただどんな大河もとをたどれば小さな流れが寄り合い集まったものであります。そんな流れを一本でもつくる事が私がすべての人に報いる事であると感じています。

合宿で学びし国史の清流を伝へ遺せる人になりたし

日本人としての誇りを学んだ

(天草郡荅北町立荅北中学校 片山慎二)

今回この合宿を通してあらためて日本の良さ、日本人としての誇り、日本(人)の原点を学ぶことができました。大きくとりあげると

○日本人で良かったということ

○学んだことを他者にいかに伝えるかということ

「学ぶこと」においては到達点はないと思います。そして何より学んだことを他者に伝え、他者の意見を採り上げてこそ「学ぶこと」の原点があると思います。

今回の合宿では自分はまだまだ勉強不足でしたし、自分ができているかを痛感することができました。同時に将来の日本に不安を抱く一人として一縷の望みや展望が開けたと思います。五日間本当に勉強になりました。

素晴らしき友と語らひ学びゆく日本の夜明けも近しと思ふ



四日目午後、地区別懇談。各地区毎に集まり、合宿以降の活動について話し合ひ交流を深めた。

感謝

(羽後信用金庫 須田清文)

今の世の中にあつて誠に希有な時間、ありがたきひとときを体験させていただき感謝申し上げます。生きて行く勇氣と情熱が湧いてまゐりました。色々知恵を出して実行して行きたく思つてをります。

み友らのまごころつよく響ききてつながりたやさず進みゆきなむ

祖父に伝えたかった

(同朋天神保育園 武重大輔)

日本人として、学問のスタートは先祖と天皇への感謝だと思ひました。十年前に他界した祖父はいつも先祖と天皇の話聞かせてくれていたにも関わらず、その重みを少しも理解できず、また理解しようともせず理屈ばかり言つていました。今回の合宿でやっと、やっと祖父の伝えたかった事、その重みが心に伝わりました。しかし祖父はもういません。伝えたかった。「おじいちゃんの孫でよかった、菊池武重の家に生まれてよかった」と。

今の氣持を忘れず、保育園と塾で、日本人としての誇りを伝えてゆきたいと思ひます。子供達にすぐにわかつてもらえなくても構わない。いつかわかつてくれると信じて…。

合宿教室に参加して

孫として生享けしこと今は亡き祖父に感謝を捧げまつらむ
ふつふつとわが体内に流れくる御祖みおぢのおもひ引き継ぎゆかむ

短歌に興味をもつた

(福岡日産プリンス(株) 谷 稔)

私はこの合宿が何を勉強する合宿であるのかという事がよく分らないままに参加しました。

合宿中には数々の御講義を受けさせていただきましたが、私がつとも興味を持ちましたのは短歌の時間でありました。阿蘇山の中岳の方に登り、火口のある山頂まで登つたのですが、その時思つたのが阿蘇山の美しさでした。

短歌にその美しさを表現することはただ単に美しいなと思うのとは別で、とても難しいものだと思います。班長から短歌は一つの感動を深く掘り下げ、その感動を素直な文章にし、その後五七五七七の短歌の形に整えていく事が大事だとアドバイスいただきました。数多くこれからも短歌を作り、この合宿で学んだことを反芻していきたいと思ひます。

青年の家の部屋より中岳を臨みて

中岳のそよぐ草原青空の晴れわたる見え心地よきかな

今がスタートライン

(莊島幼稚園 堤 孝雄)

今回参加して思ったことは、自分が日本のことをいかに何も知らず、未熟であったかということです。

子供たちの教育に携わる過程で、未来を担う子供たちに本来に伝えていかなければならないものは何か？ 自問自答する中で自分自身が自国の歴史、文化をもっと学ばねばならないというのが、今回の合宿に参加を志望した動機でした。

貴重な講義を拝聴し、独自の文明を持つ我が国は、豊かな感性に根ざした歴史に支えられていると感じました。

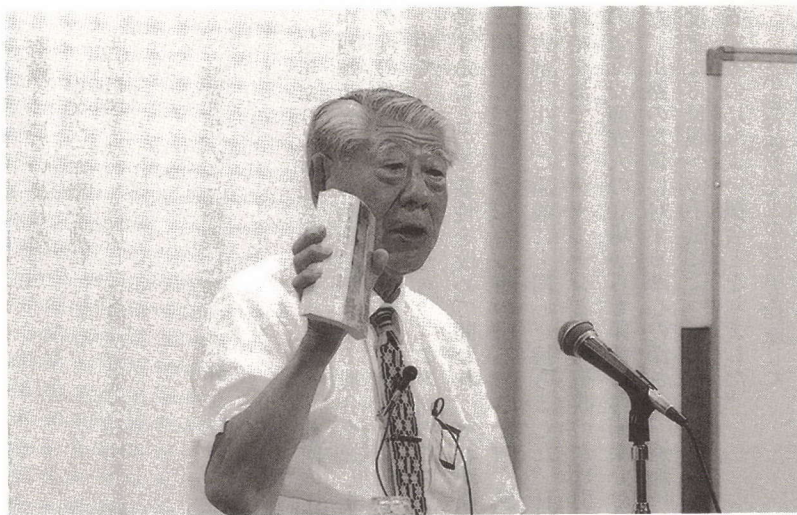
そうした歴史、文化、心を次世代を担う子供たちにも伝えていきたいと思えます。今、スタートラインに立ったようなものです。このご縁を生かして精進していきたいと思えます。

お世話になった皆様、ありがとうございます。
豊かなる日本の国の感性を幼き児らに語り伝へむ

ひっかかっていたものが取れた

(俣丸菱 平田 亮)

今回の講義を受けたことで、今まで心にひっかかっていた



四日日夜。国民文化研究会副会長 長内俊平先生は、当会の源流にあたられる黒上正一郎先生と梅木紹男氏の友情にふれて「この合宿教室の基がそこにある。いのちを分け合ふやうな友達を得て帰ってもらひたい」と語られた。

小骨が取れた思いがします。

祖父などが語る戦前、戦中の話と教室で教わる歴史の話が結びつかないことに違和感を覚えていました。その原因が教育と憲法にあると知ったとき、すべてが氷解していくように思われました。

肉親同士で会話にならないことは悲劇以外のなにものでもないと思います。

正しい教育が親、子、そして孫まで連なつて受けられるようになるという、あたりまえのことを願わずにはいられません。

先人の残せし心知るほどに背筋に力入る思ひす

日本文化の保護継承発展にはこのような研修が必要

(産経新聞社 對島好一)

四十九回目の合宿で初めて参加しました。歴史の積み重ねの結果でしようか、それぞれの役割、時間の使い方が極めて合理的、なおかつ丁寧に組み立てられていることに感心しました。たとえば、ご講義の後の班別研修は一見ダブリのように見えながら、内容を深く理解するのに非常に効果的であることに気づきました。

学生たちが、こういう団体生活を通じ、学問だけでなく、礼儀作法などを身につけることが、人間形成に大きく役立つものと確信致します。日本文化の保護継承発展は、口だけで

はなし得ません。それにはこうした実践が是非必要です。

今後ともいい協力関係が築けるよう努めたいと存じます。

有難うございました。

亡父の三年祭を前に

まづ祖国くにを思へと言ひし亡父ちち徳び元氣なる日本を創らむとぞ思ふ

諸先生のご講義に深い感銘を受けた

(藤村酒造 藤村孝信)

二年ぶりに参加させて頂きました。前回の江田島合宿では、中西輝政先生のお話をお聴きする機会を逸しましたので、この度の先生のお話には、殊更深い感銘を覚えました。

中でも「この国のかたち」「この国のこころのかたち」を愛することの重要性を改めて問われ、それがなければこころも国土もバラバラになる事の恐ろしさを強く感じました。

占部先生のご講義にも関心を持ちました。日露和親条約の締結交渉でのプチャーチンと川路聖謨のかけ引きの様は、私のような商売人の立場からも非常に興味深いお話でした。また、川路の母親に対する孝心の深さが、遠地における日記や度重なる母親への手紙によって知られ、私の日頃の行動を反省するのにもよい機会となりました。

小田村四郎先生のお話を拝聴して

現憲法の問題はるるお言葉の強さに我も力漲る

「誇りある立派な日本人」を作って行くのが使命

(株)レコイ 近藤 建

十数年ぶり、三回目の合宿参加。日本の将来、今の教育制度の下に育った若者に危惧の念を抱いているが、一方、この合宿で学生達の学ぶ姿勢を見るにつけ、少し救われた思いを抱いた。

いつの間にか年配者の部類に入っていた私だったが、国を想う情熱と使命感は益々燃え、今回学んだ事も加えつつ、自分を磨き、そして社員や私の空手道場の弟子達にも教え、共に学び、少しでも沢山の「誇りある立派な日本人」を作って行くのが私の使命と思った。

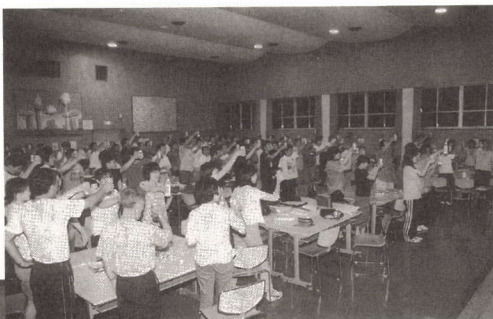
お世話下さった役員の皆様、一緒に学んだ皆様に心よりお礼を申し上げます。
日の本の栄えを願ふ益荒夫の集ひ学びき鷲飛ぶ阿蘇に

この気持ちを大事にし、伝えたい

(株)東京浜田秀英堂 濱田弘文

合宿に来る前は、一体どういう事をする団体なのだろう、何だか変な方向へ洗脳されるのでは、と不安と希望を抱いていました。しかし、本当に楽しく、今まで自分が考えて来た事を多数の人達と一緒に考えて、また、教えられて「我が意を得たり」の気持ちで一杯です。これからの日本は、根性の

カメラ・レポート 23



夜の集ひ。研修中の緊張感とはうって変わってにぎやかな雰囲気が開かれる。

ある日本人をどんでん育てないといけない。

私は合宿を通して学んだこの気持ちを、まず、家に帰って子供達、家内に伝え、学ばせたい。この気持ちを持続させることが大事ですが、日が経つと忘れてしまうのではと不安です。その時こそ短歌を詠んで、自分を再び燃やします。

合宿でご一緒させて頂いた皆様、沢山の事を教えて頂きました。この気持ちを大事にします。ありがとうございます。

学び来し時はや過ぎて我が家に帰りたしと思へど寂しくもあり

また会はむその日のために努めなむその日が来ると信じてやまず

先人の気持ちを想ひありがたき涙がやまず歌の力に

父を想ふ家業を継ぐは難けれど歩み寄りたしと思ひわびつつ

日頃経験できないことを多く学んだ

(九州電力 辻 慎一)

初めて合宿教室に参加させていただきました。日本の歴史や文化を研究し守っていくこと、短歌を通して言葉を大事にし日本の伝統文化とのつながりを持つことなど、これまであまり考えたことがないことが体験できて、プラスになったと思います。

特に印象に残ったのは、石村僊悟社長の「経営と人育てーいのちある言葉を伝えたいー」です。自分も小学生の子供を持つ親として考え悩むことがあります、「型」にはめること、逆境が人を育てること、物事に粘り強く取り組み達成し

たとときの感動を味わわせることなど、すぐに実践できることを学ばせていただきました。また、企業家としても「企業は人なり」につながる人材育成の心得を教えてくださいました。班別研修では、異業種の方々の日頃の経験に基く貴重な御意見をお聴きすることができました。有難うございました。痛き足ひきずり走るラグーマン今日の努力が明日花咲く

合宿を機会に少しずつでも勉強して行きたい

(徳肥後銀行 福田健太郎)

先人達が築き上げられた日本の文化伝統をベースとして現在の私が在ること、その文化伝統を誇張したり隠したりすることなく正しく認識し、伝えていくことが自分を成長させ、ひいては国の有り様を変えていくという事を勉強させていただきました。

初めての合宿参加でとまどいましたが、講話を拝聴し、班の皆様の意見を聞くにつれ、私の考えの浅薄さ、無関心さを恥じる反面、知らない事を知る楽しさを感じるようになりました。

私知っていた日本国とは、受身の姿勢で得た知識から成り立っており、偏ったものであったようです。今回の研修参加を機会に、少しずつでも勉強して行きたいと思えます。

これからも多くの事を学ばんと心新たに吾帰途につく

（ことごと）に心が洗はれた

（熊本市役所 折田豊生）

二泊三日の短い期間だったが、充実した時を過ごすことができた。国のいのちに触れる経験はどれほどあってもいい。諸先生方の御講義、同班の諸兄の言葉も心に響き、ことごとくに心が洗はれた。

合宿全体の流れも申し分なかった。運営に携はられた諸兄の御尽力に心から感謝したい。

中西輝政先生の御講義をお聴きして

和魂洋才のいづれを欠きても日本はうまくいかぬと説き給ひけり

和魂いま衰へ果てて国のさま見るに堪へざり哀しかれども

新たな友出で来なば新たな道開かれむ行く折々に

小柳左門大兄の御講義をお聴きして

み友らと涙ふきつつおほみうた説き給へるを聴きまつるかな

み国思ふ思ひ一つに友皆の心すべられゆくが嬉しき

おほみうた読みまつりつつ日の本の民と生まれし幸をしぞ思ふ



夜の集ひ。出し物の一コマ。心の通ひ合った友達と忘れられない時を共に過ごす。

第二十三班—社会人—

心を寄せて学び合ふ

(中島法律事務所 中島繁樹)

わが国の歴史上伝統的に生成した人としての生き方を学ぶといふ合宿目的によく沿った、いい合宿であったと思ふ。

絹田洋一先生の楠正成のお話。石村僂悟先生の経験に基づくお話。小柳左門先生の君民一和伝統のお話。いづれも感動的であった。

わが社会人班は狭い部屋に九人も寝起きする窮屈な生活であったが、互ひに率直に意見を述べ合ふ、いい雰囲気であった。様々の所から多くの人たちが集ひ、心を寄せて学び合ふ、希有なこの合宿の存続が強くなる。師は述べぬわれらの進むこの道は教育勅語がとに示すと海ゆかばを歌ひしことの感動を叫ぶごとくに語る友はも

小林秀雄先生を慕つて

(産経新聞社正論調査室 大内保治)

短歌創作と輪読では宝辺、坂東阿先生にお世話になりました。占部先生の日露和親条約からむご講義では、先生の熱

情に参りました。

さて小林先生、やっと参りました。阿蘇へ。平田篤胤のひそみならひ、没後の押し掛け門人として嬉しい限りです。昭和五十三年八月六日、御歳七十六才になられた先生は、「感想—本居宣長をめぐる—」と題して当研究会五回目の最後のご講義をなさいました。

今年の日露開戦一〇〇年目、来年五月二十七日は日本海海戦一〇〇年目に当ります。平成十六年十一月五日雑誌『正論』は臨時増刊号第三弾「日本海海戦と明治人の気概」を発売致します。ご支援下さい。

日本海海戦一〇〇年目を来年に控へて

先人がのこせしさを守るためかたりつぐかな日本海海戦

秋立ちぬ風はふかねどさはやかに日の丸あがれ日の本のくに
ひぐらしの声に聞き入り思ひ致す今日の靖國いかばかりかと
ますらをが阿蘇につどひてげきしあふ日の本くるし日の本くるし

歴史と伝統と文化について考えた

(湯亭こんや 青砥誠一)

普段は旅館経営のみに追われて、日本の歴史について伝統について文化についてなかなかじっくりと考える時間がありません。この合宿教室ではそれらについて考える時間をもつ事が出来ます。

近年中国が日本の領海を侵犯し、油田天然ガスの調査を

行っています。同様にソ連、韓国、北朝鮮など日本を取りまく国々が日本に対して外交的圧力を行使しています。領土問題、領海問題に日本の弱腰の姿勢が目立っています。無念さを痛感します。

憲法改正をし日本人自らの手による新しい憲法（大日本帝国憲法を手本とする）を制定する必要があると思います。

日本のすばらしいみずみずしい歴史伝統文化を現代によみがえらせる事が急務であると思います。

小野吉宣大兄台湾訪問団報告を聞きて

台湾の国柄守る日本の軍人らのいさをたたへむ
涙して声をつまらせ懸命に台湾の旅を語り給へる

人の為にといふ生活を送りたい

（日産自動車 福島徹男）

国民文化研究会の夏合宿に二十三年ぶりに参加させて頂きました。五年前セミナーマといふ病気にかかり右睾丸の摘出手術を行いました。その後、うつ病の診断も受け、その治療に二年を要しました。この五年間は自分のことしか考へられませんでした（家族のことも考へられずにあつた）。現在は術後五年経ち完治致しました。

今後この合宿の経験を生かし、まづは自分より人の為といふ生活を送つてゆきたいと思ひます。又、子供を育てる上で、今までは子供の自主性を重んじて来たが、合宿で教はつた



「合宿を顧みて」と題して、(株)国民文化研究会副会長 宝辺正久先生は我々の祖先が残した和歌や古典の文章を「ここに本当の日本を蘇らせる学問の第一歩がある」と述べられた。

「ワク」にはめる教育態度で子育てをしてゆきたいと思ひました。大変お世話になりました。

早朝散策の折

霧晴れて朝日輝く金色の阿蘇の自然に身いだかれるかな

大自然の阿蘇を取りまく清らかなすがすがしさが病をつつみ込む

感銘を受けた

(幟 浜田秀英堂 濱田由弘)

この研修に初めて参加して非常に感銘を受けました。年齢も色々な層があり、他の世間をあまり知らない私にとつては参考になりました。来年も娘もつれて参加したいと思っております。ほんとうにありがとうございます。

子供見て嫉の事を考へてりつばな人になつてと思ふ

今後の人生の原点にしたい

(西部ガス幟 松田和俊)

初めて参加させて頂いて、自分の意識の低さと、これまでの不勉強を強く痛感致しました。

日本の歴史、言葉の意味、歌の奥深さ等、三十にもなつて、大変恥ずかしい話ではありますが、今回の研修をきっかけ、原点とし、今後の人生に役立てて行きたいと思ひます。これからは私の努力しただいと認識しています。

我が子らのしつけに悩むことあれど合宿終へて身のひきしまる

歴史の背景にあるものを学んだ

(山口銀行経営管理部 加藤 卓)

今回の合宿に参加して、歴史の背景にあるものを丁寧に教えていただき非常に勉強になりました。これまでは表面的な事実のみに目を向けていた自分にとつてはショックを受けることもありましたが、今後の生きる上での指針としていきたいと思ひます。

また、今回の研修では班の仲間と自由にお互いの意見を交換することができ、一方向からの物の見方ではなく、様々な角度から見る重要性に気付くことができました。

正しい歴史を学び、しっかりとしたスタンスで自分の後輩たちにも伝えていきたいと思ひます。

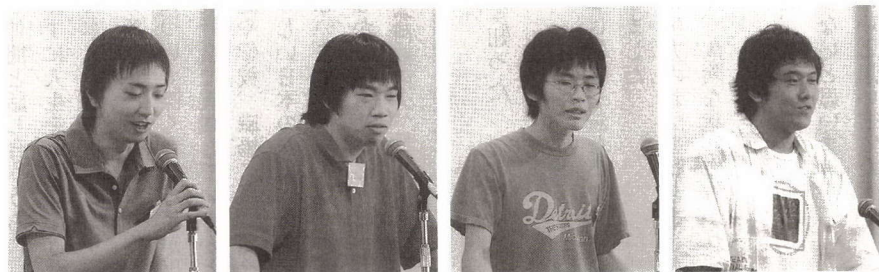
今回の研修に参加させていただき、本当にありがとうございます。ありがとうございました。

みわたせばふかきみどりのあざやかさままたこの友と会ふ日を願ふ

深く考えることができた

(伊佐ホームズ幟 岡村太郎)

貴重な時間を過ごさせて頂きました。合宿当初は戸惑いや不安もありましたが、講義を受けその後の班別研修でテーマ



参加者による全体感想自由発表。本合宿で得られた想いを皆の前で次々に語る参加者達。

第二十四班―社会人―

考えるきつかけになった

(榎丸菱 江並聖子)

私は今回初めて合宿に参加させていただきました。何も知らずに、ほんと放り込まれたような私でしたが、班員の皆さんが温かく迎えて下さいました。

何よりも強く感じたことは、自分自身が何も知らなさ過ぎるということでした。講義の中で出てくる日本の歴史や憲法のお話は、私をすり抜けていくだけで、うまく飲み込めませんでした。初めのうちは、難しい話をしているのだから仕方の無いことと、半ば投げ出していたところ、班別研修で班員の方々の解釈を聞くうちに、少しずつわかるようになりました。どんなに素晴らしいご講義を聞こうとも、受け入れる側にその準備がされていなければ、うまく吸収されないことを痛感しました。今後、私自身の土壌を耕すべく、もっと日本に感心を持ち、様々な文献に触れていきたいと思いました。大変貴重な経験をさせていただいたこと、今後の自分自身について考えるきっかけを与えて下さったことに感謝します。ありがとうございます。

初めての集ひの終はつに息つくも新たな一步のスタートを切る

に沿って自分の考えや思いを仲間と話し合ううちに、今まで自分がいかに問題意識を持たずに人生を過ごしてきたかという事に気付かされました。日本人であることの誇り、存在意義、又現在日本の置かれている立場であったり、取り巻く環境、直面している問題などについて深く考える事が出来ました。それらの考察をいかに実社会で実践していくかという事が大切だと思います。各家庭や学校、職場に戻ってその思いを実行に移すことで、素晴らしい日本の回復、再生そして創造が出来るのではないかと思います。自分を見つめ直す良い機会を与えて下さった事に心から感謝しております。

汗を拭き膝つき合はせ語りあふ阿蘇の夕べに日本の未来

短歌づくりの楽しさを知った

(日の出保育所 宮崎 崇)

今回の合宿に参加して、私は短歌を読む事や作る事の楽しさや大切さを学ばさせて頂きました。

二泊三日の中で、色々な先生方のお話を聴きましたが、今の日本は、本当に活気がなく、危険な状態に置かれているのだなあと思いました。

これからの日本は、自分達、若手の力によって、良い日本作りをしていかなければならないと思いました。

来年もまた合宿に参加したいと思いました。

仲間達と別れてゆくはさみしくも又会へる日を楽しみにする

感動を大切にしたい

(九州電力㈱ 山上友代)

今回、申し込みはしたものの何の考えもない私が参加させていただくのはとても不安でしたが、プログラムをいただき、中には今年の六月から当社の監査役になられた石村先生のご講義もあり、お話を伺うのを楽しみに参加しました。

実際に先生方のご講義を聞き、班員との意見交換等を通して、あまりに自分が日本の文化や歴史を知らなかったことと、表現の少なさに愕然としました。

明日から日常の生活に戻りますが、今後はもっと自分自身の知識を付け、小さな出来事にも心を傾け、感動した言葉は書き留めるなどして生活していきたいと思えます。

大御歌を涙し読みゆく壇上の班付の思ひ胸を打つかも

夏の阿蘇友との朝食ふと見ればトンボの大群いと懐かしき

日本人として恥じない生き方を

(小林産業㈱ 仁位智子)

この合宿への参加は初めてでしたが、新鮮な驚きと感動のし通しでした。

私は今年より予備自衛官補として訓練を受ける身です。そのため、我が国日本について、日本を取り巻く世界情勢について、情報誌「SAPIO」で勉強していました折に、この



カメラ・レポート 27

閉会式。主催者を代表して(株)国民文化研究会副理事長 磯貝保博先生は「合宿教室は今日を以って終るが、各々の地方で開かれる勉強会にも積極的に参加して欲しい。平生の過ごし方こそが大事だ」と挨拶された。

会の存在を知りました。

自分ではそれなりに、時事や歴史について知っている方だと思っていました。ここでは学ぶことが本当に多く、まだまだ未熟であったと思いました。

世界、文明、築き上げた歴史、そういった色々な面から見ても優れた日本という国に、偶然生まれたことを誇りに思います。

今後、一日本人として、公でも私でも恥じない生き方のあり方を自分なりに模索し、実行に移していける様に努力を重ねたいと思います。

早朝に緑の小道走りたる可愛きキツネに追ひ抜かれけり

短歌では嘘がつけなことを実感

(企画デザイン工房banup 諏訪田尚子)

今回の合宿で、特に心に留まったお言葉を書き記します。

まづ、石村先生の「ちよっと足りない所で我慢する、それが本当の幸せなんだ」といふお言葉に、がめつい自分を治さうと思ひました。

次に、占部先生の「具体的な歴史の事実を伝えると、子供達は歴史がわかる」といふお言葉。絶望的にさへ思つてゐた歴史教育の惨状に、希望を持つことができました。

そして、小柳左門先生のご講義の後の班別研修で、「(左寄りの)友達に天皇とは何かとうまく説明できない」と打ち

明けた際に、稲田先生が「天皇とはもともと在る存在で、日本の国柄そのものなのだ。天皇がをられなくなったら、日本は日本でなくなるのだ」と、ご指導下さり、胸のすく思ひがしました。

今回あらためて、短歌は、心にも思つてない事や、大袈裟な表現を歌にしても、どこかしらじらしく、すぐに見破られてしまふと実感しました。その嘘がつきやうがない短歌、といふ事をふまへた上で、小柳左門先生がご講義下さつた、歴代天皇の御歌をよむと、どれも民の幸せの事を祈るものばかりです。かやうな思ひやりに満ちたお心をお持ちの歴代天皇の方々、特に昭和天皇が、戦争責任者などとみなされてしまふ風潮があることに憤りを感じずにはをられません。

この度も、良い勉強をさせていただくことができました。ありがとうございました。

登和子さんへ(登山の際)

楽し気に写真撮らるる御姿は心に眩し若々し君

美和子さんへ(班別研修の際に)

國の為イカれた論調敢へて読む君の努力に頭が下がる

友代さんへ(短歌創作の際に)

だんだんと皆と打ち解けゆくことが嬉しと曰ふ我も嬉しき

智子さんへ

己の國は己が守ると実際に行動さるる君頼もしき

聖子さんへ(短歌創作の際に)

本当に初めてつくる歌なのかさうだとすれば君は歌人だ



閉会式後。別れを前に各班にて記念撮影。

千絵さんへ（班別研修の際に）

ハキハキと思ひスラスラ語るその明るさで皆も安らぐ

家族の後押しで参加できた合宿

（居宅介護支援センター コスモピア熊本 折田登和子）

長年、主人を通して国文研の活動を見て来、応援をしてきました。今回初めて合宿に参加しました。

近年同会員の奥様も講演会に一緒に出席していらつしやると聞いて、私も受講する機会を得てみましたし、子供達の合宿参加により、その様子を聞いたりしてゐたので、いつか自分も合宿に参加してみたいと思つておりました。それで今回主人と子供達の熱心な後押しにより、参加する事を決めました。

とは言へ、普段から自分の考へを言葉にして表す事の難しさを、主人に、成長していく子供達に、又仕事上でも感じておりましたので、決めてからの不安は大変なものでした。

先生方の御講義には、どう考へ、どう生きていけばよいのか、昔から今にかけて日本を守つてこられた人々の心と共に、生き生きと映し出され、方向付けをして下さる内容がたくさん含まれてをり、何か話せるやうになるのではないかといふ気持ちが出て来、不安が解けていく思ひがしました。

「解らなくても学んで、いつか解るやうになると信じて、読み重ねていく事が大切である。」と話された長内先生のお話

しは、私を勇気づけ、これから少しづつでも学んでいきたいと考へました。

合宿初日

いつの日か我も行かんと思ひ来し学びの集ひに今ぞ来にける

長内先生にお会ひして

み便りの筆文字美しき師の君は御年八十三才になられしといふ

慰霊祭に向かふ折に

暗き道師の君の手を取りまつり共に登れば夏草香る

長内先生のお話をお聴きして

壇上の師のみことばは力強く心に深くしみ入る思ひす

師の君の御ことば胸に仰ぎつつ学びの道を歩みゆきたし

先人達の祈りの中に、自分が生かされている

（安高千絵）

まず、和歌を詠み、相互批評をしていただいた中で、自分の心を言葉に表していくことがいかに難しいことかを痛感した。そしてまた、和歌にはその作者の気持ちや願いや祈りが込められているから、しっかりと読み味わつて作者の気持ちを思んではないかといけないのだと思わされた。そういったものが和歌であると感じた上で、四日目の小柳左門先生の御講義の中で御製を聞いたとき、天皇は、常に常に祈られてあるのだなあと感じた。左門先生が紹介して下さつた明治天皇の御歌の中で、「世とともに語りつたへよ國のため命をす

てし人のいさをを」というのがすごく心に残った。まるで、今、自分が明治天皇に願いを託されているような気持ちになった。

この国文研に来て、たくさんの方々の先人の方々が命をかけて国を守ってきた姿を知り、心にふれた以上もっともつと伝えていかなければと思った。たくさんの方々の先人達の祈りの中に、今、自分が生かされていることが、有難くてたまらない気持ちになった。先人達は命をかけて国を守っていかれた。今、この時代に生かされて、私自身が国の為に来ることは、命をかけて日本のすばらしさを伝えていくことだと感じた。もっともつと必死になりたいと思う。

友どちのここに集ひてよかつたと語る姿見うれし涙す

中西先生の御講義に勇気づけられた

(牧 美和子)

この合宿の参加は三回目となりますが、毎回多くの感動と学びがあり、それをまとめることは本当に難しいです。

あえて一つを挙げると、中西輝政先生の御講義でした。

「中国は収縮する国境の歴史を持つ国」から始まって「六大文明圏の中で、日本だけが一国一文明である。その為に異文明である他国との外交に苦しむ。また愛国心なくして、国・文明を守りきれない。日本人は日本以外に行く場所を持たない」という主旨のお話でした。



閉会式後。名残を惜しみつつ、皆を見送る。



何故これが、印象的だったかという、私の日常の葛藤を整理していただけたからです。私は外交官でも政治家でもありませんが、対外姿勢について自分の考えが持てずに悩んでいたのです。今回の御講義は日本とそれ以外の国の違いについて新しい視点を授かり、自分自身の意見の創出に前進できるような気がします。

また「日本人が他国の人と比べて資質が高く、それを持てれば比較的優位になれるのは、モチベーションの高さである」というお話にはとても勇気づけられました。中西先生のおっしゃる日本人のモチベーションの高さというのは、日本人は感動する心が一番優れているという事ではないでしょうか。これからも、もっともっと心を磨いて感動する心を失わぬよう努力していかなければならないと思いました。

御製うたに仰うぐ古よりのまごころにあななありがたしとひたに涙なみだす

合宿中に創作された「短歌詠草」

—しきしまのみち—



短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多く短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなってしまうてをります。従つて、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとつて、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごごころの籠つた言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行つた様思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深淺、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直にうたひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」と呼んできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによつて、人間にとつて最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合つてきたのです。先祖の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に先祖の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく先祖とつながりをもつた日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとつて最も根源的な心の問題がなほざりにされてをります。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一步でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同志の相互批評によつて集中的になされてゆきます。心の奥底に眠つてゐるまごごころを呼び覚まし、人のまごごころに敏感に感じる、素朴にして溢れる人間性を取り戻さうとする

試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿三日目の午後、是松秀文氏（福岡市立和白東小学校教諭）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。慌ただしい日程の中で生み出された短歌ではありませんが、作者の集中された内心の働きがはばしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠つてをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・印刷のための清書作業を通じて、翌日には歌稿となつて参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに久保田真氏（熊本県立宇土高校教諭）によつて、短歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた御話の中にも一語一語に含まれる作者の心を全身をもつて偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。その後、各班ごとに班員全員による相互批評が行はれ短歌の表現を通じお互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において、寝食を共にし、胸中を披瀝し合つて来た友情の結び付きが、一段と確認されました。

短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者ひとりひとりに、言ひ知れぬ喜びをもたらすことになりました。

ここに収録された歌の数々は、その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読みとり下されば、と心から祈念する次第です。

短歌詠草 (しきしまのみち) 合宿第一回目の創作作品 (参加学生の第二回目の作品は感想文の末尾に収録)

第一班

東北大学院博士課程 大岡 一 亘
帝国憲法が「皇宗の遺訓」を成文化した
ものだと聞きて

わが国に古よりの生き方を書き記したる法ありといふ

早稲田大法四 濱崎 史 嘉
突然の雨も忘れて牛馬とたはむることのいと
おもしろし

佐賀大文化教育一 吉田 達郎
昔見し阿蘇の火口の風景が昔と変わらず我を迎へる

九州工業大院二 真崎 浩 一
雨中^{あまなか}にじつと立ちたる馬の目の我を見つめる
気色ぞあはれ

亜細亜大法三 佐野 宜志
一緒に台湾に行った友らの発表を見て
発表で熱が入りたる友を見て我が胸中も熱くなりぬる

東洋大文二 野中 哲朗
講義にて師のお話を聴きをれば眠気に襲はれ

頭下がりぬ

九州大院二 世利 喜裕
車来て身をばよせつつ子を守る赤牛に習ふ親子愛かな

明星大日本文化三 宮地 順造
サッカーアジアカップで日中決勝戦がおこなはれた折に

サッカーの決勝戦を見たのにやむにやまれず短歌をつくる

日本青年協議会 外村 聖典
阿蘇の火口をのぞきし折りに
火口より大いにけぶり立ちのぼり風にゆられてせまりくるかな

強き風のけぶり払ひて湯だまりに土柱噴く姿あらはる

第二班

獨協大経三 菊間 翔
せつかくの阿蘇の山には硫黄吹き雨が降りしき下山したりき

早稲田大法四 川尻 善之

中岳の偉大な自然にぢかに触れ日本のよきとこ一つまた知る

長崎大教五 竹下 博喜
いくとせも時のたつらし岩鼻は丹碧の色鮮やかにつく

亜細亜大国際一 青木 俊憲
雨が降りめがみの恋とのぼせたが彼女のメールで我にしらける

電気通信大機工三 中島 誉主也
火口よりグツグツと湧く噴煙は竜のごとくに天翔りゆく

新垣 貞治
自らの思ひを胸に集ひきし友らの言葉に力を感ず

九州工業大情報工二 林 祥人
胸中の温気を持ちて我もまた古典の輪読続け
てゆきたし

東京大学法四 武田 有朋
福岡空港にて時枝兄を迎へし折りに
合宿を楽しみといふ後輩の明るき笑顔をうれしく思ふ

班別研修の後班員と語りひて

夜ふけまで話は尽きねど草臥れて思ひ思ひに
布団に入りぬ

阿蘇中岳火口に

班員と火口を見やれば噴煙の下にたぎりし湯
だまりの見ゆ

鳥栖市役所 西 山 八 郎

班別研修（長内先生のこと）

胸内の思ひのたけをあるがまま語りたまへる
姿尊し

かりそめの言葉にあらず胸内ゆわき出づる言
葉はらにしみ入りぬ

憫日本教文社 坂 本 芳 明

中岳噴火口登山

道すがら火口の方を見上ぐれば流るる雲の火
口に入りぬ

遠くより上り雷鳴の音とどろきて雨のふらぬ
を心に祈る

火口より硫黄の臭ひのたち込めて思はず鼻を
タオルでふさぐ

めづらしきもの見てきしと班員のこたふる顔
のかがやきにけり

第三班

岐阜経済大経営二 佐 藤 駿 介
亡き友の命日に詠ふ

亡き友の別れをしのぶ我が心その思ひ未だに
忘れず

獨協大学経済四 吉 田 和 正
討論会空虚な自信砕かれて恥をかきしも得た
もの多し

佐賀大学文教三 末 永 直

牧場の馬を見し折に
垂らしたる頭左右に動していなく様に驚か
ざるる

九州工業大情報工学修士一

結 川 高 志
班長としての心構へを考へし折に

未熟ゆゑ技は拙き我なれど心遣ひは忘れたく
なし

福岡大学工四 穴 井 俊 輔
我が朋友^{とも}益荒男達の魂を我らが受けずばた
れが受け継ぐ

敬愛大学経済四 谷 村 修 也
くまもとの大地に生きる馬のかみなびけば感
ずるその地の大きさ

早稲田大法四 高 木 雅 史

長内先生が班別研修に來られし折に
背を向けて我らの靴を直さるる先生の姿に深
く恥ぢ入る

九州大学工一 馬 場 章 央
我を見つめる牛の頭の大きさに近づくを得ず
ただくをののく

防衛大理工三 森 浩 典
雨の中遅れて着いたこの部屋で暖かい迎へに
ひたに感謝す

憫アルバック 北 浜 道

開会式学生挨拶を聞きて
全国ゆあまたの友が集ひ來し事のうれしと語
り出しぬ

慰霊祭

（尙）岡山商事 岡 山 英 一

雲晴れて星輝けるみまつりの夜となりけりこ
の夏もまた

第四班

杏林大社会科学四 青 木 啓 昌
中岳火口硫黄のごとき噴煙に頭くらくら下山
したくなる

獨協大法二 鈴木 正樹

阿蘇山を汗をかきつつ登りぬれば頬撫でる風
に顔が綻ぶ

西南学院大文二 多久 善彦

夜中に語り合ひて後

心中に生ぜし疑問ぶつけ合ひいつしか夜はふ
けてゆきけり

夜中まで心の底から語り合ふ友を得し事ひた
に感謝す

九州工業大情報工四 大津 健志

中岳を下山してゐる折りに

どんよりと曇りし空のすき間からわづかに差
し込む光美し

明治大理工三 小柳 雄平

草千里にて

雨止みて濡れたる草を食みながら歩きし馬の
姿美し

早稲田大法三 米村 頼人

立ち上ぼる煙淵より臨み見て新たに感ず阿蘇
の猛きを

亜細亜大国際関係三 本間 隆宏

草千里時ぞともなくはたた神牛らいづこへ逃
げむとするや

防衛大理工三 船山 尚志

草千里雨降る中に牛とゐてそのぬくもりに

生命を感ず

横浜国立大工二 工藤 雅章

阿蘇の山に己が心を研ぎ澄まし御霊の姿を見
し心地する

榎石村萬盛堂 石村 僭悟

講義の機会を戴いた折に

おりおり父・祖父の遺せし言の葉を若き友
等に語り伝へり

言の葉のひとつひとつに父・祖父の息吹の直
によみがへるごと

膝上に幼きわれをかかへ抱き優しく強く論せ

し祖父は
小径にて人避くるごと商ひも譲り譲りて行け
と諭さる

若き日の悩み乱れし我が心を「莫妄想」と論
せし父は

諭されし強き言葉の折々に心定むる力となり
ぬ

ハローワーク福岡南 古川 広治

穴井兄の挨拶を想ひ返して班別研修を省
みる

友からの手紙を読むやうな姿勢にて話を聴か
うとのべし君はも

第五班

千葉県立四街道北高等学校普通科二

菅谷 潤

久方の規則正しい生活で眠れぬ夜に友を思ひ
ぬ

桃山学院大社会学部一 梅山 裕大

火口から絶えず吹き出す白煙の登りゆく様勇
ましきかな

早稲田大法四 穴井 宏明

堂々と仲間率ゐて歩みゆく雌牛の姿を、し
かりける

亜細亜大国際関係一 山室 貴弘

積み重ねね色とりどりの岩肌に過ぎし時代の跡
を刻めり

長崎大医学一 茅野 龍馬

なげきつゝひねり出す歌はつたないがただ高
岳の眺めめでたし

九州大農五 森 永賢司

火口よりのぼり来るガスの濃くなりて山下る
べしと警告さるる

慶應大法三 木村 大和

久々にバランス取れし食事取り思はず浮かぶ
母親の顔

早稲田大政経一時 枝 秀 行
噴煙にむせぶ子供の口おほふ母のハンカチに
親心見る

獨協大外国四 藤 崎 洋 平
幼き日祖父と歩きしこの道を祖父を迎へに歩
く新盆

三 林 浩 行
石村僊悟先生の御講義をお聴きして
お仕事ととつくみ合はれ学問を活きたるもの
になされしを見る

第十一班

麗澤大外国語四 川 尻 聡 美
軒下で仲間と共に雨やどり楽しき会話雨に感
謝す

古 井 萌
阿蘇山で牛に番号や名前を印す時は毛を
染めると聞いて
みどりの野原にちらほらと見える赤牛のそめ
ぬきの毛の遠くに見える

龍谷大法三 四 方 みのり
中岳の景色見ながら食らひたるアイスにボン
タンおいしく思ふ

福岡大科目等履修性 小 野 実 里
浅緑の野山の中に小さくも色紫の花は咲きた
り

東北女子大家政二 小笠原 有 那
先人の想ひに心打たれつつ将来の為今学ばん
とす

福岡女子大文四 黒 岩 礼 子
早朝にめざめてききしひぐらしのすずやかな
こゑこちよきかな

合宿参加を決める折
合宿に参加することなやみしも父の言葉を信
じて決意す

東北女子大家政二 西 塚 みつる
日々感ず我の思ひを打ち明けて仲間と共にわ
かち合ふなり

元日産自動車 古 川 修
八月六日の朝
六年経て再び来たる大阿蘇の夜明けの雲の美
しきかな
若き日のあまたの思ひよみがへり阿蘇の山々
なつかしく見ゆ

別 府 正 智
草千里にて
やがて雨あがらむものと待ちたれどつひにぞ
雨は上がることなし

高原を歩む楽しみはかなはざれともらと語り
しことぞうれしき

第十二班

麗澤大学国際経済一 小 林 紀 恵
晴れし日に窓開け見ゆる大自然そよ風入りて
いと気持ちよし

福岡大学人文科学修士二 河 野 牧 子
窓をあけ夕焼け空をながむれば涼しき風と虫
の鳴くこゑ

お茶の水女子大学生活科学三 中 島 明 子
雄大な阿蘇の自然を眺めつつ皆で迎ふる朝す
がすがし

東北女子大家政学一 堂 端 桃 子
阿蘇の山駆け登り友と息切れて苦しと思へど
なんと楽しき

西南学院大学文学部三 森 山 苑 子
日本への思ひが同じ友に出会ひ語らふことを
うれしく思ふ

早稲田大学社会科学部三 川 井 茜
若かりし父の仰ぎし師にまみえ時超ゆる教へ
に心震へたり

福岡教育大学教育学部二 山口 瑛 美

楠兄弟

ますらが最期のときからからとうち笑ふ
姿に残れり

信念にそむかず生きて生き抜きし人の最期の
姿と思へり

最後まで力の限り生き抜きし先人の心になら
ひてしかな

㈱IHIエアロスペース 内 海 勝 彦
班員と阿蘇中岳に登る

乙女らとくさぐさの事語りつゝ夏草茂る小径
行くなり

にはかにも大きな谷現れり底ひも見えず煙
噴きそり

赤黒き粗岩肌の眼前に広がりありて我に迫り
来

かなたより強き硫黄の臭来て火口近きを思は
しめらる

油然と湧き上がりたる白煙を班員ら黙して佇
みそりぬ

元新潟工科大教授 大 岡 弘
小田村四郎先生の御講義をお聴きして

国の憲法効無きことが正しきと語り給ひぬ資
料駆使して

されど今は改正の他道なしと進みゆくべき道

示されぬ

むづかしき問題なりきされど我も資料を読み
て学びてゆかむ

第十三班

早稲田大教育三 小 林 由香利

草千里にて

馬に乗り弾む心は高鳴りて幼き頃の我に返り
ぬ

福岡女子大学文三 馬 場 智 茶
合宿にてすばらしき御講義にふれるたびわが
胸中の温気高まる

東京女子医科大学看護三 藤 崎 敦 子
どれ程に拙い私の問ひかけも真剣に答へる友
ありがたし

北海道大学法二 安 田 陽 子
合宿に参加して

あなうれし祖国をおもふあまたなる友らと語
るこの喜びを

早稲田大学第一文学一 原 川 翠
ものごとを知りたいと思ふ胸中の温気がまこ
とをとらへ得るかな

東北女子大学家政二 成 田 教 子
新しい友と出会ひて話し合ひ祖国の歴史の深

さ感ずる

福岡教育大学教育一 平 賀 初 枝
夕食で盛られしすいかの山を見て我臨海学校
を思ひ出すかな

第二十一班

川 下 継 範

雨上がり阿蘇の景色に目を見張りそこに流る
る火の国旅情

福岡日産プリンス 谷 稔
先生の講義を聞いて想像す大和の郷里の人々
達を

羽後信用金庫 須 田 清 文
オルゴール響和国を見学して

をちこちゆ集ひし新たななみともらと語りあひ
つつともによごしぬ

職人の技の高さもしのばるるおもむき深きオ
ルゴールかな

澄みわたるゼンマイじかけのオルゴールの音
色は深く胸に響きぬ

苓北町立苓北中学校 片 山 慎 二
初めての短歌を詠んで我思ふ短歌はなごてか
くも難し

同朋天神保育園 武重 大輔
古の詞に触れて今はなほわが祖の姿眼に浮か
びぬ

㈱福岡銀行箱崎支店 遠藤 洋平
先人のやまとのことばに触れてみてその情景
のまぶたに映る

㈱丸菱 浜田 守
国立阿蘇青年の家に植られし一株を見て
その丸き群青の花ヒゴタイの亡びることのな
きこと願ふ

福岡県立門司高等学校 副島 賢三
班別研修を続けて

若きらとともに語りしまことみちたふとき時
間よさらに広まれ

和歌を教はりて
歌よみの国に生まれてありがたくうたひ継ぐ
べし子々孫々まで

元日立製作所 日高 廣人
頂きを雲にかくせる根子岳の荒き山肌眼に迫
り来る

雄大な外輪山に囲まれて阿蘇の五岳は競ひて
並ぶ

熊本空港に着きて
神谷 正一

ふりしきる雨に雷のとどろきてレクリエー

シヨンのいかにぞと思ふ

第二十二班

㈱ビコイ 近藤 建
國想ふ若人と共に学び行けば阿蘇の中空晴れ
くる思ひす

産経新聞社 對馬 好一
大正の蒸機「あそBOY」追ふ子らを見れば
幼き日を思ひ出づ

九州電力㈱ 辻 慎一
湧き水に素足をひたし遊びつつ心澄みゆき時
を忘るる

㈱丸菱 平田 亮
遠雷にふと見上ぐれば雨雲のいつしか尾根に
かかりてありけり
雷の離るるにつれ広ごれる蟬の鳴く音に暑さ
は戻る

㈱東京浜田秀英堂 濱田 弘文
阿蘇に来て学びし事ども思ひつつ早く帰りに
子らに会いたし
いつの日か仙酔峡の真清水に浸りて子らと水
遊びせむ

㈱肥後銀行 福田 健太郎
初めての合宿参加にとまどふも皆の意見に心

ひかるる

謙虚さを忘れずにある先輩の真摯なる姿に吾
感銘す

藤村酒造㈱ 藤村 孝信
石村先生のお話をお聞きして
幾世代我が会社にも伝ひ来し伝統の重さを我
も思ひぬ

莊島幼稚園 堤 孝雄
仙酔峡清き流れに足つけて食べたるむすびの
味は忘れじ
仙酔峡尾根に響ける雷鳴に見上ぐる高岳雲に
かくるる

幼な子の帽子をひろふ父親の姿を見つつ吾が
子を思ふ
幼な児の行方見守る若き母のまなざし受けつ
つ子は歩みゆく

熊本市役所 折田 豊生
夏日さす阿蘇の国原青々と水田広がり見るに
豊けし
吹きよぐる風に吹かれてみ友らと昼餉とるな
り語り合ひつつ

鳴神のとどろき聞こえてたちまちに夕立雲の
移り来るかも
夕立にけぶれる阿蘇の大野原見つつ朝けの講
義を思ひぬ

麗しき野山の息吹きさながらに国のいのちも
蘇らなむ

第二十三班

日産自動車 榎 福 島 徹 男

長内先生のお手紙を頂いて

癌が治りぬとお伝へすれば先生はまみを浮べ
て我に寄り給ふ

先生の癌は治るよとふお手紙を信じて我は生
き返りけり

中島法律事務所 中 島 繁 樹

暑き陽を避けて水辺の橋下の陰に座りてにぎ
りめし食ふ

高岳の中つ斜面の谷川の水辺に遊ぶ素足ひた
して

帰らむとバスに移るや一面にはかに雨のは
げしく降りぬ

産経新聞社正論調査室 大 内 保 治

八月十五日を目前に控へて

ひぐらしの声に聞きいり思ひいたす今日の靖
国いかばかりや

日の出保育所 宮 崎 崇

阿蘇山の仙酔峡に来て良き友と話はずめばう
れしかりけり

伊佐ホームズ 岡 村 太 郎
にはか雨に降られて帰る道筋のけむる山々涼
しかりけり

山口銀行 加 藤 卓

過ぎし日の仲間と聞きし蝉せみの声思ひつつ聞く
新しき友と

榎浜田秀英堂 濱 田 由 弘

真清水の川をつくづく見たりけり我が心洗ふ
阿蘇山の川

西部ガス 松 田 和 俊

合宿に不安と期待感じるも阿蘇の夕立に会ふ
がすがしさ

湯亭こんや 青 砥 誠 一

合宿教室のレクリエーション阿蘇登山に
て

坂道を登りてゆけば眼前に阿蘇の山々真下に
見ゆる

突然に雷鳴と共に夕立が激しく降りて服をぬ
らすも

雨上り夏の日射しが照りつける阿蘇の山々緑
美し

第二十四班

居宅介護コスモセンター コスモピア 熊本

折 田 登和子

班員と心通へばバスの中声もはずみて語りゆ
くなり

企画デザイン工房 banup

諏訪田 尚 子

高原の柵にまたがり友どちとほぼほるおにぎ
りなんとおいしき

安 高 千 絵

数年間会はず過ぎこし後輩の声掛けくれつ昔
のままに

榎丸菱 江 並 聖 子

見渡せば阿蘇の山並雄大に汗つたふ身にせま
りくるかも

九州電力 山 上 友 代

初めての友との出会ひも時とともにうちとけ
ていく心うれしき

仙酔峡の水の流るるを見つめつつ我の疲れも
癒えるを覚ゆ

小林産業 仁 位 智 子

緑濃きカルデラに響く雷いかづちの音を雄々しき阿
蘇の山々

先人の心に触れて我もまた熱き思ひの沸き上

がりたり

牧 美和子

ほとばしる温気こもりて語る師を伝ひ溶けて
宿りしふる言熱し

国民文化研究会

上村 和男

久方ぶり中岳に登る
バス窓ゆ見ゆる景色のなつかしく山々近くさ
らになつかし

友どちと笑みつ語らひ中岳の噴煙めざし登る
は楽し

(二回目の作品)

朝露をふみしめゆけば真向ひに根子岳・高岳
そびえせまりく
山々は九重の山ゆさしのぼる朝日に映えて姿
美し

いただきに漂ふ雲もあかねさし緑もはえてさ
やかなりけり

石村僖悟兄の講話をき、て

いくとせも会ふことなくも志貫き生きし友の
言葉は

阿蘇登山

小田村 四郎

中岳に登りしはいつのことなりし遅れがちな
る歩み淋しき
噴煙の立ちのぼる火口を背に負ひて写真撮る
友らの楽しげに見ゆ

雷鳴の近くとどろき吹く風の冷たくなりぬ疾
く下りるべし

かつて見し軍馬慰霊碑見当らずガイドに聞け
ど知らずと答ふ

山中代議士の撰文になる慰霊碑は軍馬の功
を讃へてありし

登山みちのつけかへられて慰霊碑の忘れゆ
くは淋しかりけり

(二回目の作品)

見はるかす阿蘇の山里今朝もまた朝日に映え
て緑美し

この里に友らと集ひ学びたる日数楽しく思ひ
出でつつ

準備せし講義なれども時間足らず言ひ尽くせ
ざること多かりき

伝へたきことのみ多く聴く人の期待に副ひ得
ず申し訳なしと思ふ

さはあれど合宿の感激次々に語る友らを有難
しと思ふ

み国いまだならぬとき若きらの育ちゆく世
をひたに祈るも

宝 辺 正久

合宿参加行、車窓

肥後大津過ぎて行く手に夏雲のかがやく阿蘇
の山ひらけ見ゆ

みまかりし友おきて阿蘇に入らむとすわが年
月の合宿教室（徳永兄を思ふ）

外輪の棚田をわけてゆるゆるとわが汽車下る
谷の広野に

村里の立木過ぐれば阿蘇の野や大観峰は障る
なく見ゆ

阿蘇五岳雲おほへれど青草の広野が原に日は
輝けり

(二回目の作品)

第二日 朝

朝露の小草を踏みて丘に上り真向ひに立つ根
子岳仰ぐ

朝空に輝く根子の岩が根を仰ぎて思ふ亡き師
亡き友

友と共に来にし道かと阿蘇原の露にぬれつつ
あゆむ朝かも

第三日 慰霊祭の後

みまつりの斎庭のあとの草原に吹きわたたりく
る夜風涼しき

みたまたち喜びますかつらなりし人らは和む
原の夜風に

明りなき芝草原に吹く風のわたりゆくなりみ
まつりのあと

小柳 陽太郎

古事記輪読講義

若きよりくりかへしよみし古ごとのいまよみ
がへり胸とどろくも

「ほぞちのごと切り拆」く力みなぎりていの
ちあふるるやまとのことは

「悲しとも悲し」としのぶ宣長のあつきこ
ろに胸せまりくる

流れくる櫛を手にとりいかばかりなげきまし
けむ命かなしも

「あづまはや」その一ことにこめましあつ
きおもひを偲ばざらめや

た、なづく青垣山にこもりたるやまとは日の
本のはのふるさと

あめつちにあふるることばみなぎりにて読みゆ
くまに心おどるも

目がかがやかし我を見つむる若きらのあつき
思ひに応へざらめや

ふるごとにつ、まれてすごせし一ときのうち
しおもひを忘れじとはに

(二回目の作品)

天皇に直結するといふよろこびをあふるるお
もひに語る若きら

かくも美しき国に生れしかともごもに語る
と聞けば心ゆらぐも

元電源開発環境立地本部本部部長代理

長内 俊平

兼田誠一大兄忙しきなかを割きて訪れ給

ふ 忙しきなかを割かれて来給へる君と向ひ合ひ

つ、言葉出で来ず
夜の更けをはるる来給ひすぐ帰るとふ友の

情の有難きかな
語らる、言葉短かけれわが上をおもふまこと

のこもるみ言葉
むつみ合ふいとまもあらず掌をかたく握りて

廊に袂を別つ
奥様にと土産をわが手に握らせて友は帰りゆ

く夜更けの廊を
(二回目の作品)

(二回目の作品)

「合宿へ来てよかった」といふ若きらの声を
しきけば胸あつくなる

海ゆかば歌へしことを涙ながらよろこび語る
若き友あり

たよるべき道なきいまの若きらにこたふるこ

の道たやさぬ手だてを

今 林 賢 郁

慰霊祭準備

大空に高鳴る雷の近づきてにはかにくもる阿
蘇のみ空よ

みまつりの齋庭定めむと思ふままに阿蘇山脈
に雨の降りしく

雨あがり高岳のぞむ一角に齋庭整ふ作業始め
ぬ

磯 貝 保 博

大阿蘇の空たちまちにかきくもり今日も激し
き夕立の来て

黒雲の流るる間よりいなづまの光りてのちに
雷とどろく

こゑやみしせみも鳴き出し山並も再び見えて
のどかさもどる

(二回目の作品)

感想発表を聞きながら

とつとつと語る言葉にまごころの伝はり来り
て涙とまらず

坂 東 一 男

合宿運営委員に送った檄文に寄せて

大阿蘇の学びに集ひし友達的笑顔思ひつつ文
たたため

仙酔峽登山

頂上に登りて根子岳みあぐればはるか彼方に
雨ぐも広がる

腰おろし弁当開け食ひはじむ雷とどろき味ふ
間もなし

せつかくの弁当ゆへに最後まで友等たたせて
急ぎ食べたり

(二回目の作品)

大丈夫のいのちのきはみ語りつぐ合宿教室を
続けゆかなむ

いかならむまがことありと乗り越えて合宿教
室続ける心もちたし

山内健生

お茶をもとめて自動販売機の前にをりし
時(七日午後十一時少し前)

どよめきの声にふりむけばサッカー勝つとの
テレビの中継何事と

同宿の高校生らはやったあと歓声あげてこも
ごも抱き合ふ

本当かと思はずテレビにかけ寄りて日本の勝
利を確めんとす

くつきり日本連覇の文字あれば急ぎ戻りてみ
友に告げたり

友もまた「エッ本当」と声をあげ眼輝かせ
我に応へぬ

(二回目の作品)

慰霊祭の斎庭設営準備終りぬ

気がかりの雨も遠のきみ祭りの斎庭のしつら
へやうやう終りぬ

日中の暑も去りて草原の斎庭ライトに浮き立
つかしこし

白き紙垂青き竹にぞ浮き映えてくさはら涼し
みまつり近づく

(社)国民文化研究会 山口秀範

ご講義後、中西輝政先生のお供をして阿
蘇神社に参拝す

師の君を案内せむとて下り行く車窓を叩く雨
音著し

肥後の国一の宮なる御社を訪ねたしとふ師に
従ひつ

御社に近づくままに雨足はいや強まりてあた
りも煙る

参道を傘さし行けど効なく御服御靴はたち
まち濡れそぼつ

天地をとよもすばかり降り注ぐ雨をいとはず
境内進む

師の君と二人並びて拍手の意気合はせつつ
深く祈りつ

師の君を阿蘇に迎へて詣づれば荒ぶる神の手
荒きもてなし

服に靴にしみ入る雨滴にいささかも動ぜず歩

む大人の風

我が国を損ふ政権生まれなば「反米」に立つ
と告らせし師なり

後々も忘れぬ今日の宮詣と笑みさはやかに
師は去り給ふ

小野吉宣

中西先生の御講義のをりに

「靖國に参拝せむ」とふ米國の大統領に外務
は「否」と

中共を恐れ阿ねて外務省憤ろしも「否」と
云ひしと

(二回目の作品)

三日目の朝のつどひに

涼風のときに吹き来てさはやかに朝のつどひ
の進みゆくなり

君が代を声たからかに歌ひつつ昇る日の丸仰
ぎをるかも

白さぎの飛びたる群の見えたれば神話の世界
に入る思ひす

先頭を飛ぶ白さぎは両翼に数羽白鷺従へてを
り

小柳兄の講義の折に

「日の本のよくなる気ざし」と我友(小柳左
門兄)は白さぎ飛ぶを愛で給ふなり

捨身飼虎さながらなりと終戦の御歌を誦し友
は嗚咽す

我もまた泣いてをるなり御聖断下し給へるみ
かどをしのび

伊佐ホームズ(幟) 伊 佐 裕

国思ひ道求めむと参加せし友の姿に力湧き来
る

(二回目の作品)

小柳左門先生の御講義を拝して
師の君は国の真姿伝へむと涙伝はし御製拝し

ぬ

熊本県立東稜高校 白 濱 裕

中岳の火口の縁ゆ見下せばさ霧は晴れて火口

底見ゆ

大阿蘇の鼓動の如く吹きいづる黒き泥流力强
しも

山口県立下松高等学校 宝 辺 矢太郎

石村僧悟氏の御講話をききて

祖父君の興したまへる萬盛堂いやさかえきて
ももとせをへつ

浮きしづみあまたさやりをのりこえてあきな

ひつづくをひたにねがふと

暴騰のいちごのるケーキをすゑおきの値と決
したまへる心やいかに

いちご作る人らも意気に感じたり萬盛堂には

いちご卸すと

(二回目の作品)

閉会式にて

君が代はとうたふもろごゑ館内をとよもしひ
びくちからにみちて

大君のまします国のひなにあれ生くるさちを
し思はずにあらざ

みずほコーポレート銀行 小 柳 志乃夫

石村先輩のお話を聞きて

(修猷館高校運動会)

事故に負けず七段ピラミッドの競技をば残せ
し館長の決断うれし

七段ピラミッド完成したる高校生のふるひた

つ顔面影に立つ

感動こそ人の育ちゆく源とのらせる先輩の言
の葉強し

(お子様の怪我)

チェーンソーに中指の先落とせしとふみ子の

お話聞くに痛まし

先輩と奥様といかにお心を痛めましけむ事故

の知らせに

十数枚書き連ねませし先輩の便りをいかに読
みませしかみ子は

逆境ゆ立ち上がりませしみ子のこと語ります
先輩の面輪かがやく

父と子と心一つに雄々しくも生きますお話聞
くにともしも

(二回目の作品)

日の丸の揚がりゆく朝の青空に白鷺の群れ飛
びてゆくかも

福岡県立香住丘高校 酒 村 聰一郎
師の君は古事記を朗々と誦みゆき給ふみ心込
めて

白鳥となりて御陵ゆ天翔ける倭 建 命雄々
しき

悲しくも雄々しき姿に日本人の生き方教ふる
とふこれの書はも

とふこれの書はも

班別の話合いの折に 藤 新 成 信

日章工業(幟)

昼下がりの大夕立に洗はれて丘の緑はかがや
きて見ゆ

(二回目の作品)

いかならむことのあるとも合宿のたふとき事

業を絶やさじと思ふ

末 次 祐 司

慰霊祭

指折りて亡き友のみ名を数へつ、在りし日偲
ぶ今宵のみ祭

降ちゆくみ国の姿いばかりみそなはずらむ
友のみたまは

つたかなる身にしあれども力つくし若き友ら
と歩みゆかなむ

(二回目の作品)

朝の集ひ

緑なす阿蘇の山々眺めつ、友ら集ひて国旗掲
げり

もるともに君が代唱ひて日の丸を仰ぐかなた
に白さぎの翔ぶ

目に沁みる緑にも染まず白さぎは東の方へ翔
び去りてゆく

白鳥の翔びゆく見れば悲しもよ日本武命思ほ
ゆ

稲田事務所 稲田 健二

雷鳴をともし来たる夕立の激しくも降る滝
のごとくに

(二回目の作品)

国柄の清流もとめ古典をば学ぶ努力をふるひ
起さん

山本 伸治

遠雷にまじり聞ゆるセミの声に山あひの静け
さいやましにけり

室内に流れる声にせまりくる師の御姿の生き
生きとして

(二回目の作品)

やること何かありませんかと声ひびくアルバ

イト生の姿たのもし

室内に広がりわたるご講義の師のみ声に聞き
耳たてる

富山工業高校 岸本 弘

絹田洋一先生御講義

正成の姿正目にしのぶがに熱き思ひを語りま
しける

若き日ゆひたたり来し正道を堰を切るごと
語り給ひき

石村僭悟先生御講話

楽しげに君語りゆく若き日に師や友達と学び
しことを

祖父の教へ父の勞今君の商ふ道に生きてあ
ららし

(二回目の作品)

一足早く合宿地を去りて

「小歌うたひて」とふ言葉一つも賜はりて阿
蘇のさ庭へ去りゆく我は

鐵路行く目にしたはしく大阿蘇の嶺山峽に見
え隠れつつ

(第二回短歌創作に取り組んでゐるであ
らう十三班の班員を)

おのおのも尽きぬなごりを詠み交はし家路
に思ひをはせてをるらむ

(開会式で挨拶をすることになりしと聞
きし十三班班長小林由香利さんのこと
を)

オトタチバナの姫かと思つるかの乙女今壇上
に立てる頃かも

福岡東医療センター 小柳 左門

石村僭悟大兄の講話を聞きて

若き日とともに学びしわが友の今壇上に語り
ゆくかな

なりはひの日々よりうまれし言の葉は生き生
きとして胸を打つかも

祖父様のひざにだかれて聞きし句を心にとど
め今も生く君は

チェーンソーに指を切りたる子に宛ててあま
たの手紙書きし友かな

人のため世のためと生く友がきの言葉さやか
に身にしみてゆく

○

講義終へて外に出づれば沛然と雨ふりいでつ
阿蘇の原野に

夕立の雨音激しく屋根を打ちて語らふ友の声
もとだえつ

稲妻の光るとみるや轟然と地を揺らして響く
雷

いかづちの音はしだいに遠のきて阿蘇国原に

ひぐらしはなく

(二回目の作品)

朝露をふみて行く足とどむれば虫の音きこゆ
阿蘇の草原あそはらのくさほら

見わたせば阿蘇の原野は朝もやに沈みてはる
かに大観峯みゆたいたんぼ

さしのぼる朝日に向かひ拌みけり御製の講義
無事に終へしと

草原の間にひそと咲きにけりうす紅色のなで
しこの花

原川 猛雄

録音中に(石村僂悟兄)

イアホンより友のみ声の響ききてなつかしき
思ひに横顔見つめる

東中野 修道

天地をうちたたかにかにかづちの音のとどろ
く阿蘇の原かな

白雲のたなびく阿蘇におのがじし思ひ思ひに
蟬の鳴くかな

三十年と七年前のこの阿蘇の合宿に來しが原
点となりぬ

同期なる石村君の御講話にめがしらうるむあ
りがたきかな

古くからのみたまつりにみずみずしきいの
ち吹きこむ大岡君は

(二回目の作品)

民思ふ天皇のお歌といてゆく君の調べに耳傾
けり

防衛庁 鏗 信弘

石村僂悟先生のご講話をお聞きして
指失くし苦しみ電話せし吾子をつき離しまし

し御心いかに

再生の手術勸むれど御子の答へは指無きまま
で良しと言ひけり

指無きを油断せざる戒めと生きむといふ御子
の言葉清しも

(二回目の作品)

君が代を歌ひてあふぐ大阿蘇の空を白鷺群れ
て飛びゆく

薄霞む阿蘇の山並み迫れるをよぎりて鷺の群
れ移りゆく

昼餉終へふとながめたる窓の外の緑の丘辺秋
津飛び交ふ

大牟田市立勝立中学校 西原 正博

雨上り祭壇つくる庭辺には風吹くまゝにとん
ば飛び交ふ

(二回目の作品)

全体感想自由発表を聞きて

今は亡き祖父が歌ひし「海ゆかば」合宿で歌
ふと思はざりきと

「海ゆかば」歌へてうれしと語りたる友の
言葉胸に迫りく

藤 寛明

皆が阿蘇登山に行きし後、事務局にて
雨雲のひろがりたるや遠くより雷の音きこえ

来るなり

前方に晴れ間みゆれど大粒の雨大地へとふり
始めたり

ふりしきる雨の彼方に登山する人びとのうへ
晴れ間あらなむ

奈田 明憲

阿蘇登山に出發したレクリエーションを
見送りに

山頂で雨に遭ひしか参加者は黒雲蓋ふ尾根を
見上げて

(二回目の作品)

事務局にて講義の有線放送を聴く
忙しき中にも耳を傾ける講義の声のありがた

きかな

防衛庁 山根 清

ひとしきり激ち降りたる夕立もあがりてみ山
ゆ吹く風涼し

師の君の車イス押し奥様と講堂ゆきしそのか
み偲ばる

壇上ゆ遺言のごと語られし姿み言葉思ひ出

さるる

(二回目の作品)

全体感想自由発表にて

壇上につきつぎ立ちて胸のうち語りゆく友らの姿うるはし

祖父君の遺灰を泣きつつ海原に撒きし体験を友は語りぬ

慰霊祭に祖父君偲びつつ、海ゆかば“思ひをこめて歌ひしといふ

大阪府立南寝屋川高校 絹 田 洋 一
倭建命を

燃ゆる火の火中に立ちて比売の名を呼び求めませし命なりしか

さがむの野の炎に包まれもろともに死なむとせしに比売の名呼ばしぬ

弟橘比売を

身をさ、げ命を救はむと走水の暴き浪たつ海に入ります

うせましし比売のみくしは君の待つ海辺に依りきときくもかなしも

うつしみは海のもずくと消ゆるともみぐしは君のもとへ依りきぬ

(二回目の作品)

夜の集ひの折、防衛大学の学生の演目
で、その訓練と日常生活の様を見て

入退室の動作あいさつは目に耳にとまらぬが

ごとすばやかりけり

入退室の動作にわずかのすきもなく武道の技を見るこ、ちして

敵味方の距離近づくにつれほふく前進の姿勢はしだいに低くなりゆく

はふがごとほふく前進をする後輩の頭上に敵弾飛びかふが見ゆ

事あらばこのをのこらは身を捨て、国のみ盾となりて征くらむ

事あらばこの若きはみ戦に征きて戦ふ運命なるらむ

全体感想発表にて結川兄の発表を聞きて小学校中学校は友どちとの良き思ひ出はなかりしといふ

友どちとの良き思ひ出を作るなど我にはかなはじと思ひて過ごし来と

「三班のみんなのおかげで我が心のすきまうまりし」と声ふるはせり

長年のつらく苦しき胸内を語りゆく友の声つまりたり

長くつらき心のすきまをうめくれし友ありがたしと涙す君は

表には見えない苦しみを皆の前であらには語る、胸内を思ふ

森 田 仁 士

慰霊祭準備の折、にわか雨降りて

み霊らのみ守りありせば止みますと友と語りつつ空を見あげし

(二回目の作品)

長内先生の御講話を聴きて

合宿は体解心解を学ぶため集ひしものと師は語ります

福岡県立小郡高校 矢 永 誠 二

慰霊祭のリハーサルを終へて心配せし雨もあがりておごそかに祭りの庭はととのひにけり

草原をくだりてゆけば虫の音にまじりて鳥のこゑもきこゆる

(二回目の作品)

小柳左門先生の御講義を聴きて

国やすく民やすかれと朝夕に祈り給へることぞかしこし

大君のわれら国民を思はるる御言葉心にしみてくるなり

熊本製粉㈱ 吉 村 浩 之
合宿前日奈良の藤村孝信兄より電話あり

心こめ造りし酒を慰霊祭にささぐるために送りしといふ

突然の君の御声のなつかしく心づかひのかた
じけなくも

二十年前阿蘇に集ひてすこしたる君の笑顔
思ひ出しけり

(二回目の作品)

夕立の上がりて峰の緑まし木立の間よりひぐ
らしのなく

熊本県立御船高校 今村武人

慰霊祭の準備で笹を二本もち帰る折

高岳の雄々しき姿をあふぎ見れば笹持ち登れ
ど足は軽し

(二回目の作品)

久保田兄の講義を聞きて

壇上に学生らの歌批評する友の姿ぞたのもの
し見ゆ

眞田博之

合宿に参加して

久々に会ひまつる先輩友なれどいつも会ひ
る心地するかな

(二回目の作品)

絹田、吉村両大兄の太平記にまつはるお
話をお側で伺ひて

ほればれと聞きまつるかな先輩達の熱く語ら
る昔語りを

お話を伺ふうちに我もまた読みたき心高ぶり

てきし

いつまでも聞きまつりたき心地して先輩達ゆ
離れがたしも

神奈川県教育庁総務室 大日方 学

午前の講義にて講堂に入りし折、アルバ

イトの神谷さんが掃除をしてゐるのを見
て

椅子の上に落ちて死にたる羽虫を一人静かに

掃き取り給ふも

人のためいとふことなく黙々と働くみ姿が
すがしきかな

熊本県立宇土高校 久保田 眞

中岳登山

岩壁の奥より次ぎ次ぎ噴煙をふき出し来る阿
蘇の中岳

(二回目の作品)

去年の班員四人と今年も再会できて

「久しぶり」と言葉交はせば昨年の親しみ湧
き出づ昨日のごとくに

台湾の地を訪れて日の本の速きみ祖の心知る
てふ

(武田君)

小中の空白埋むる経験すと涙ながらに君は語
れる

去年より笑顔で過ぐす君見れば是非来年も逢
ひたしと思ふ

(結川君)

(俳) HITO エンタープライズ

三林 浩行

歴代の天すまひて 皇のお気持ち御歌にふれてしの
びゆきにし

熊本市教育委員会 濱口 知久

早くつきし友らに負けじと流れ出る汗をふき
つつ作業すすむる

(二回目の作品)

毎日のやうに響く雷鳴を聞きて

みるがうちに山の天気の変はりゆけば夜の行
事の行方を憂ふ

自由発表を聞きて

友どちの熱くも語る声を聞きて携はれしをあ
りがたく思ふ

(社) 国民文化研究会事務局 茅野 輝章

合宿運営本部にて

全国ゆ集へる友と語らふを思ひ描きつつ名簿
作りぬ

申し込み書の裏に記されしそれぞれの思ひ偲
びつつキーボードたたく

はや空も白みはじめてすがすがし合宿の初日
の朝を迎へぬ

東洋紡績(株) 庭本 秀一郎

アルバイトの高校生達

「やることはありませんか」と暇あれば尋ね

に来るは頼もしきかな

きびきびと体動かし作業する君らの姿楽しげに見ゆ

(二回目の作品)

合宿を裏で支へる指揮班の仕事を終へて心すがしも

福岡県立久留米高校 小林 国平

指揮班アルバイト担当より

学生や先生方と席並べ講義に臨む姿たのもし

(二回目の作品)

アルバイト諸兄へ(小田村・西山・廣

木・工藤・神谷)

若き日に君らの父が合宿で学びしものを感じたまへや

末長く共に学びて付き合へる友達得しこと忘れざらなむ

(株)ラック 高橋 俊太郎

指揮班所属で合宿に参加して

汗だく走り回りつ、感ずるは皆を支ふる陰の楽しさ

日中の準備の合間に

神鳴りて小雨降る中歩きゆけば涼風ふきて暑さ忘るる

(二回目の作品)

合宿終へ気持ち新たに日々を生きまたの機会

に朋友と集はん

横浜市なしの木学園 徳田 浩介
慰霊祭の準備中に雷雨となりけるを
おそろしき稲妻の音も心せば神の御歌と聴こえずともなし

(二回目の作品)

指揮班として参加して

そこここに楽しげな友らの顔見えて影で支へることを誇れり

中尾スタジオ 大坪 あい

突然の雨を避けつつ語り合ひ虹を待ちわぶ帰路に着く時

学習院高等科二年 小田村 康 正

赤の牛の瞳の奥は美しき果てなき黒き鏡のやうに

鳥栖高校 西山 將太郎

カルデラの中に来て、少年の家に着いて、二夜をすごして

少年の家あたり一面草一杯牛も一杯虫も一杯よし次だ仕事を探せと辺り見て見つけて終へてさあ次の仕事

(二回目の作品)

文華女子高等学校一年 神谷 彩由美

バスの中草千里で見た赤牛の親子とつても仲が良い

(二回目の作品)

アルバイトはだで感じて働いたみんなのやくにたつ喜びを

福岡舞鶴高校 廣木 文屋

はてしなく阿蘇のカルデラいと美し阿蘇の火口もまたいと美し

(二回目の作品)

アルバイト地道な作業いときつしでもこの作業嬉しときもあり

藤沢市立大清水中学校 工藤 晋太郎

春休み日台文化交流青少年スカラシップで台湾に行き、李登輝先生にお逢ひして

先生の御言葉胸に今一度阿蘇の合宿に向かうよ我は

(二回目の作品)

長内先生に母から授ったプレゼントをさしあげた際に

師が我に礼される姿見せられて我感激し笑顔をこぼす

わが脳に師のほほえみが浮かぶ時今亡き祖父を思ひ出すかな

見学者

福岡県立三井高校教頭 小林 至

仙酔峡に向ふバスの中より

車窓よりうす雲の中前方にのこぎり状の根子
岳の見ゆ

朝の集ひにて

胸を張り誇りに満ちた友どちと国歌斉唱の中
日の丸上がる

主婦 庭 本 和香子

長内先生の講義を聴いて

良き話に耳従はねどただ聴けば心にたまると
師は語り給ふ

健やかなる耳もちながら聴けぬ身を励まし給
ふ心地こそすれ

公務員 村 山 健 司

故郷福岡県北九州市の戸畑祇園大山笠を
想ひて

玄海の荒波のよな男衆戸畑の街を大山笠が行
く

この祭りそしてこの国を守るため今こそ立て
よ燃える魂

合宿地に寄せられたお歌

山 田 輝 彦

火の山の地熱のとはに燃ゆるごと国のいのち
もとこしへにあれ

痛みし身の祈りのせめて届けかし集ひて学ぶ
若きらのもと

吹く風にも秋の深まりが感じられる今日この頃ですが、皆さんにはその後如何お過ごしでしょうか。熊本県「国立阿蘇青年の家」で共に学び、語り合った「合宿教室」から早や三ヶ月が過ぎようとしてをります。このたびやうやくこの「感想文集」を皆さんのお手許にお届け出来る運びになりました。この「感想文集」は、「合宿教室」の最後に走り書きしていただいた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長又は班付の方々（国民文化研究会会員）に、感想文と第二回の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のこもった文章・短歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは、神経を使ひ、時間のかかる作業ではありますが、皆さんの生々しい言葉にお一人お一人の感動を偲ぶことのできる心楽しい一時でした。それぞれの方々に編集していただいた編集方針は以下の通りです。

(一) 「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを基本方針としました。ただし、ページ数の関係で執筆者のお心のうちが最も強く表現されてゐると思はれるところを摘録しました。文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持ちを通りながら、原文のニュアンスが損なはれないやう慎重に加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字及び文法上の誤りについては訂正してをります。

(二) 「短歌」について

合宿では二回にわたって短歌をつくりましたが、第一回のもものは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく巻末の「短歌詠草」のところに収めました。また、この感想文の執筆の折につくっていただいた第二回の短歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正いたしました。

この「感想文集」作成のためには、班長および班付の方々以外にも多くの方々の御協力を得ました。お忙しいお仕事の中で、休日や勤務終了後の時間をさいてご協力いただきま

した磯貝保博、高橋俊太郎、坂本芳明、鏝信弘、池松伸典、小柳志乃夫、山根清、茅野輝章の各氏に心から御礼申し上げます。

最後に、この「感想文集」の「あらまし」作成および第一回目の短歌の編集にご尽力いただいた国民文化研究会会員の諸氏に厚く御礼申し上げます。またカメラ・レポートの写真は中尾国博さん及び大坪あいさんにお世話になりました。

いろいろな方々のご努力によって出来上がった「感想文集」を、ご精読下さるやう切願します。

読み進むにつれて、「合宿教室」の四泊五日間の様々な感動が鮮明に甦ってくる事と思ひます。三ヶ月前に得た感動を単なる「思ひ出」に終らせることなく、起居を共にした真に語りうる友との交流に、また新たな学問の求道への出発点とされるやう切に願つてをります。なほ、ご精読後には、是非とも班長や班付の方々、班友に一筆御便りを差し上げていただきたく願ひ申し上げます。

(北浜 道 記)

〔資料〕

第四十九回 “合宿教室（阿蘇）” 感想文集

非売品

平成十六年十一月二十日発行

編集兼発行者

社団法人 国民文化研究会

理事長 上村和男

編集長 北浜道

東京都渋谷区東一―十三―一四〇二号

〒一五〇―〇〇二一

電話 〇三―五四六八―六三三〇

FAX 〇三―五四六八―一四七〇

